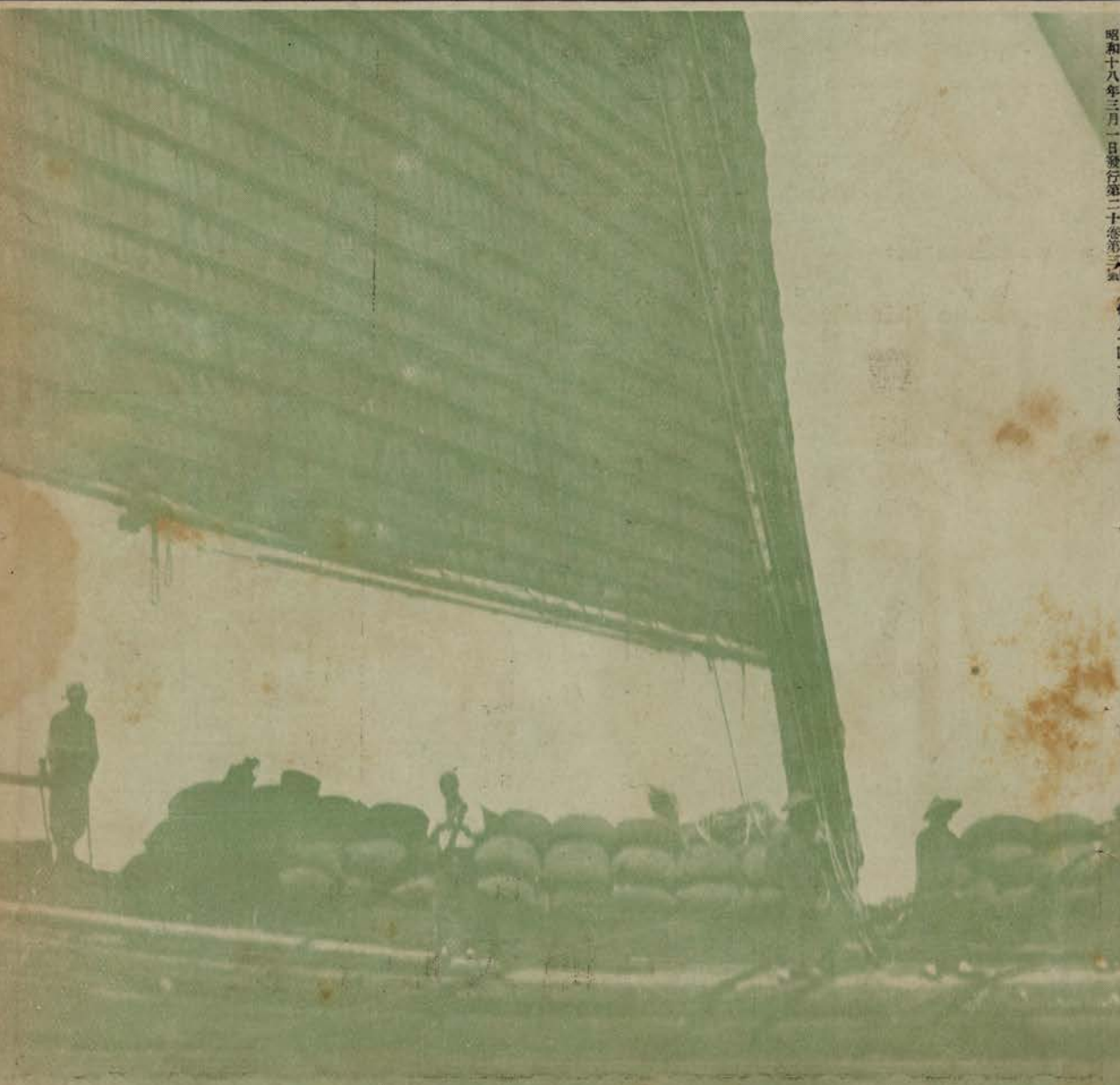
柳の雑話

麻生路郎★主宰　三月號

昭和十八年三月一日發行第二十卷第三號



Pensoj flugas trans la land-limon

ニキビ

りとびきに

美顔水

の等虫京南・蚊・蚤
！時いユカて虫毒

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

★ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の薬です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！ ゼヒお勸したい薬です！

是	吹	ニ
非	出	キ
此	物	ビ
薬	に	・

阪大・京東

桃谷順天館

川柳雜誌・三月號目次

表紙（戎克）……岩崎柳路
漫筆 銃後の匂ひ……麻生路郎…（一）
草木徒然……西田艸樂…（二〇）
武玉川研究（二八）……梅本森蛭子・鹽山東魚省二…（二二）
漫筆 丹波の餅を語る……小山文三…（三）
川柳の近畿 大和篇（九）……麻生路郎…（六）
川柳世界史（二二）……戸田孤蓬…（一九）
語源覺書（二二）……淺田一…（四五）
佛印から……小川靜觀堂…（二四）
彼を見て我を思ふ……沖野岩三郎・頭原退藏・福田山雨樓
夷一笑・櫻川不水
北極星……澤田四郎作…（三）
阿波の大凧……夷一笑…（一）
山の横文字……安川久留美…（四）
★斷食（句）……路郎・豆秋…（二四）
近作柳樽……麻生路郎選…（一六）
川柳塔……麻生路郎選…（八）
同舟近詠……諸家…（二三）
一路集
組合……大西八歩…（二〇）
不足税……北川春巢…（二二）
各地柳壇……（二二）
川柳・柳界展望…（二七）
川柳類題索引…（八）
廻轉椅子……（二七）
社關係の人々……（二六）

漫筆

銃後の匂ひ

―戰線の兵隊さんへ贈る―

麻生路郎

（一六）布哇からの手紙

二月八日に布哇からの手紙が屆いたと云へば嘘のやうであるが、ハワイ爆撃から足掛三年目の今日、ホノルルの奥地ワヒアワの不朽洞會員高澤一浪氏からの手紙をたしかに、この掌にうけとつたのである。

――先生、奥樣、特別配船太洋丸が四日（註・昭和十六年十一月）に横濱向けホノルル出帆ですが一日突然米國郵政院から郵便物積込禁止の命があり困りました。兎に角出して置いたら何時か屆くと思ひますから投函します。

と書き出してある。何時か屆くと思ひますと書いてあるやうに、足掛三年目の今日、確に屆いたのである。私は眼頭をあつくして吸ひつけられるやうにして次を讀む。

――此頃の不朽洞會員激增、心から御喜び申上げます。八月號十月十五日着、九月五日奥樣からの葉書と八、九、十の三月分十月三十一日拜受、本當に嬉しく耽讀してゐます。綠雨さんが神經痛で御困りの由ですが、これは以前自有浪さんへも申上げたことのあるブラナ療法で施療すれば直ぐに治るのですが何分六千キロから離れてゐては何とも出來ません。何卒自有浪さんへ御照會を願上ます。東京の森本秋子さんなくなられた由驚入りました。同氏は寶塚に居られた時から投句されてゐたのですが女優さんでありましたか御伺申上ます。亞鈍さんの旅の手紙（註・本誌十八卷七・八・九號參照）誠に面白く拜見致しました。今後も御健筆を煩はし度い望です。自有浪（註・舊號は自由朗）さんが一浪の浪と同字を御用ひになられて本當に御兄弟のやうな心地致します。滿潮さんが無神論者であられるそうですが私も無神論信奉者ですが私は恥しいなどとは思ひません。不朽洞會費を何んとかして御送りしたいと思ひますが當局で家族の生活費以外送らせぬには困つてゐます。何卒御送り出來る迄御待ちを願上ます。不朽洞會員兩三名推薦したいと思ひますが何分會費を送ること出來ないが、それでもよければ心當り勸誘して見たいと思ひますから御返事を願上ます。川柳忌は寛政二年九月廿三日を專門家なら太陽曆に算出することが出來ると思ひます。その日が本當の命日ではないでしやうが御參考まで申上げます。私の不朽洞會費は都合によれば愚娘齋藤みきをから或は送つて貰ふかとも思つてゐます。とに角暫く御待を御願申上ます。

十一月二日朝六時認

一浪

先生
奥樣

手紙はこれで全文である。關係の少ない人から見れば、さして興味のある手紙でないかも知れないが、六十路を越した老人が、ものの一ト月もすれば敵國となるとも知らずこまゞゝと會費のことにまで觸れてゐる手紙を讀んで全くしみゞゝとさせられたのである。

阿波の大凧

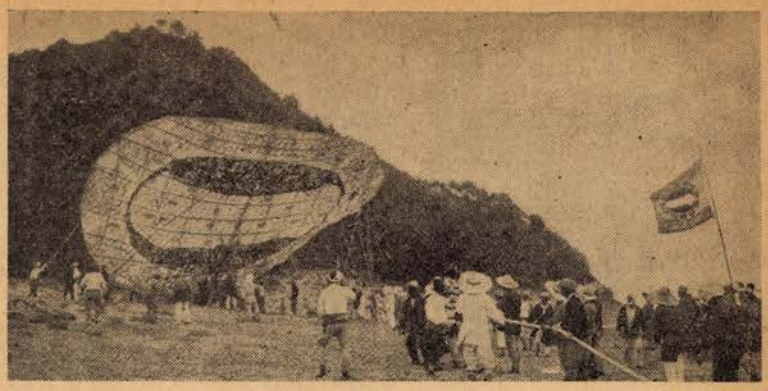
夷一笑

國籍が父子の儘にして置かず

私が早くから注意をしてゐた時に、引揚げてくれれば何んのこともなかつたのに、布哇の人たちはあまりにも樂觀しすぎてゐたことが悔やまれてならない。同封された一浪氏の作品三十句の中から左に一句を掲げる。

凧、それは大空へのあこがれの象徴でもある。凧の歴史はくわしく知らぬが、隨分昔から有つたことは事實である。人間はそれほど遠い以前から空への關心が有つたのだ。そして凧はつひに幾多の科學を產んだ。

凧の形や大きさには種々ある。圓形や四角なのや奴凧などは誰でも知るところであるが、變つたのになると飛行機



の大凧が有る。阿波の大凧と云へば實際に見て來ぬかぎりちよつと想像もつかぬ程、素晴らしく大きいものだ。普通の半紙より、やゝ大き目のキズキと稱する障子紙の一種を用ひるのであるが、これを二千枚以上も貼るのである。又その骨組も、すべて丸の青竹をそのまゝ使ふ。直徑九間半乃至十間、目方が三十貫、四十貫と云ふ大ものである。そんな大きなものが怎うして揚るか、と一應疑ふ人もあるが無理もない話である。私が大阪へ初めて丁稚に出て來た時よくこの凧の話を得意滿面で語つたものだが、朋輩の誰からも信じてもらへず、その結果、阿波の法螺吹きなどと嬲られて大そうくやしかつたことがあつた。

又私の母の若い時、こんな話がある。それは大阪の或る株屋の旦那が阿波へ遊びに來てゐて、この大凧の話を聽きどうしても信じられず、それでは揚つたらどうするかと云はれて、もし揚つたら俺の所持金を全部出すと云つた。そこで土地の人々が早速この大凧を揚げて見せたところ、彼の株屋の旦那は感激の餘り莫大な金を投出して歸つたと云ふ。

無論これは大人の遊びであるが、凧揚もこゝ迄行けば全く驚異的である。地方別におのづと競爭的になつて來て、番附けなど作り、東西にわけて横綱、大關、關わけ、小結などと大きさに準じてきめられてゐる。毎年五六月頃の南風吹く季節ともなれば、これが年中行事として行はれる。又その場所もどこでもよいと云ふ譯にはゆかぬので、大平洋に面した海岸である徳島縣下の廣土と云ふ濱へよつて來て、此處で一齊に揚げるのである。この大凧の運搬が亦容易でない。千枚張級のものでも大八車二臺を要する。それ〳〵旗を先頭に、威勢のよい掛聲でどつと此の海岸に繰込んで來る。

海岸は早くも辨當持で各地方から集つて來た見物人で賑つてゐる。二千枚張以上の横綱級になると、これを揚げるには尠くとも五六十人の人手を要する。綱はすべてマニラ麻で作つた船のロープだ。先づ一定の場所に叺で土嚢を築き、これを十五六俵づゝ數ケ所に設けて置き、これにロープを木の枝の様に引張つてつないで置く。そしてこの繋いだ箇所には五六人づゝ見張の人がついてゐる。一方凧には、頭のまわりに綱を澤山つけてある。この綱を引張つてエンヤ〳〵と頭を持上げる。これでやつと飛揚の用意が出來た譯だ。

やがて太平洋の彼方から颯つと一陣の南風が吹上げて來れば、凧はその巨大な頭を離陸して、見る〳〵中に空高く躍り揚がつて行く。此の時、餘程注意せぬと、凧の周圍の綱もろとも空中に吊上げられる恐れがある。現に、これで一命を亡くした人がある。又凧のしつぽで刎ねられて即死した事實もある。實に寸事の油斷もならない危險きわまるものである。これこそ土地の男が意氣と生命とを賭けた最もスリルに富んだ、ひとつのスポーツである。

次から次へ、海岸に運ばれて來る大凧が揚つて行つて、空一面に蔽ふが如きさまは誠に壯觀である。だがしかし、土地の男達は決してこんな事で滿足しては居なかつた。競爭心はいやが上にも白熱化して來て、今度は擊し合ひをする。擊し合ひとはどう云ふことかと云ふと、一方の凧と他方の凧が話合の上で、綱と綱とをからみ合はせて接戰させるのである。

綱が高空の烈しい風の中で相互に摩擦して火を吐く。此處に於て、ひとつの壯烈な空中戰が展開される。互ひに火を吐くことしばし、全く文字通りの白熱戰である。若しこゝへマイクを据え、實況放送でもしたなら、その興味も實に百倍することであらう。一瞬パツと火焰が上つたかと見ると、煙になつた凧は糸目を切つてはるか彼方へ飛びさつてしまふ。

こゝで一言申添へて置かねばならぬことは、この凧揚の見物人は決して風下へ立たぬことである。皆んな風上に立つて見てゐる。もしそれ風下に立つてゐると、往々にして頭上へ大凧の殘骸が墜ちて來るからである。

かうして負けた方の凧は無論のこと、勝つた方でも相當に傷んでゐる。だから一度揚げたら必らず大修繕を行ふか又新らしく制作されるのである。凧の興味は揚げる時のみに掛けられてゐるものではなく、寧ろその半分の樂しみは制作にあると云へやう。この點、今の模型グライダーも同じことであるが、凧はその制凧と云ふのがある。これは昨今非常に流行してゐる模型グライダーによく似てゐる。恰度舊式機の様に復翼になつてゐて、その胴體も鯉幟の様に吹流しになつてゐる。これは兩翼と機體の釣合ひが、よほど上手にとれていないと揚がらない。うまい具合に揚れば爆音を發してブン〳〵と唸りとても愉快である。

私の生れ故郷の阿波に名物

作方法も費用もグライダーに比して遙かに簡素である。而も興味の點ではグライダーに勝るとも、おとるものではない。例へば耐空記錄でも、數字的に判然と覺えぬが、どんな大凧でも風の具合さへよければ相當長時間揚つてゐる。其の段、スーツと二三間飛んですぐ着陸する模型グライダーより、ずつと樂しめる。又此の樣な大凧を揚るには、天候や風速も必要であるから、自然その方も科學的に研究する樣になつて來る。兎に角航空的興味と云ふ點では、模型機より凧の方が一枚上である。

阿波では大人が此の通りであるから、子供達の凧熱と云ふものは非常なものである。私も子供の時、よく自分で二枚張程な凧を作つて揚げたものである。凧揚の一番肝腎なことは糸目の長さと、しつぽの釣合ひである。しつぽが少しでも重すぎると全々揚らないし、反對に輕すぎては頭を左右に振つて落つかず、仕舞に墜ちる。又風の調子によつて、しつぽも多少長くしたり、短かくしたりする必要がある。

風の具合のよい時など、ずん〳〵糸を伸ばして行つて、やがてすつかり出してしまふと、ほんたうに〃テンマデアガレ〃と云ふ感じがする。糸卷をしつかりと持つた兩手にぐん〳〵と吊上げられさうに應へて來る心地は又樂しいものである。凧揚の最中に用事を云ひつかると、糸を卷て引をろすのが面倒くさく、又少々おしい樣な氣もして、そこらの垣根へくゝりつけて置く。用事を濟ませてもとの處へ戻つて來れば風が變つてゐて、くる〳〵ときりもみ狀態になり、今にも墜ちんばかりになつてゐる。こんな時、糸をクツクツと引てやると、又平均を取り戻して眞直ぐ揚つて行く。糸が切れて、飛ばしたこともたび〳〵ある。いつこともわからぬが、凧の飛で行つた方行へ一目散にかけ出して行く此の時、心の中は半分泣出してゐる。やつと殘骸を見つけた時には、いとほしさが込上げて來る、だが又すぐ次の制作にとりかゝるのである。

近年阿波の大凧も揚らなくなつたさうであるが、私は是非も一度復活させてもらひたいと念願してゐる、體位向上大空への精神昂揚、さらに一歩進んで科學的に航空知識を普及させる、いづれの見地からしても阿波の大凧こそは實に理想的であると思ふ。

大凧の話半分程にされ
天翔る凧に希望を見つけたり

筆端

丹波の餅を語る

小山 文三

正月の元日の朝には一家揃つて衣服を改めて雜煮餅を祝ふのである。丹波の雜煮は小餅を以てするのである。關東なぞで行はれる雜煮はすまし汁に青味を添へて小さな切り餅の燒いたのを浮かせてゐるを普通とするのであるが丹波の雜煮は聊其趣を異にするのである。即ち秋に收穫した新大豆を以て正月に間に合ふ樣に各戸共に白味噌を造るのである。白味噌は赤味噌程に長く貯藏し得ないが其代り赤味噌よりも甘味と上品な風味がある事は申す迄もない。斯くして此新白味噌を以て正月元旦の味噌汁をこしらへ之れに若干の青味を添へて此味噌汁の中へ前に述べた小餅を澤山入れて煮るのである。これに因て餅の中へ味噌汁の甘味が浸み込んで而も餅が非常に柔く且つねばくなるのである。

丹波の雜煮は餅が大きいから汁椀に雜煮餅一つを入れると、あとは味噌汁がいくらも入らないのである。換言すれば關東の雜煮餅は小さくて汁の中に浮いて居るのであるが丹波の雜煮は餅が本體で味噌汁を少しかける位のものである。

此雜煮の焚き加減にもコツがあつて、あまり焚き過ぎると煮詰つて鍋の底に餅が溶けてクツ付くし、火加減が弱ければ餅は十分に延びないで味が出ない。要するに味噌汁の中で餅が十分延び切つて而も溶ろけない程度の焚き加減が要るのである。

筆者幼少の頃には「正月の雜煮餅は年齢の數だけ食ふもの」と教へられたのであつたそして七歳から八歳の春を迎ふる正月の朝、家族達におだてられて無理に五つまで平けた事を記憶してゐるし又筆者の家に雇つてゐた男が十六歳の春を迎へてとう〳〵十二杯の雜煮を平けてしばらく首が廻らないなぞとふざけてゐた事を思ひ出すのである。

同じ丹波でも正月の元旦に此雜煮を食はないで握り飯の燒いたのを食つて祝ふ家もあるし又正月元日の晝食になつてから雜煮を祝ふ家もあるのは各其傳統と家系の如何に因る習慣の相違である。要之丹波の餅は雜煮として一番にうまく、雜煮は又正月の白味噌の熟成したのを以てするのが一番うまいとされてゐるのである。

燒いた餅は醬油を附けて食ふのがよい。味の素を加へた醬油だの砂糖を加へた醬油なぞを用ひるのは聊贅澤であるのみならず、やはり手造りの濃い生醬油をつけて食ふのでなければほんとうの餅の味が出て來ない。

別に附け燒と言つて餅のほゞ燒けた頃醬油に附けて再び乾かす程度に燒いたのや、更に之れに海苔を卷いて食ふなぞは丹波人としては採らざる處であろう、況んや燒き餅に砂糖や鹽のみを附けて食ふ等は以ての外である。

燒いた小餅を兩手で引き延ばして眞ン中へおいしい白味噌の摺つたのを小匙一杯位を載せ之れを兩方から重ね包んで柏餅の樣にして食ふのは恐らく他に例のない丹波特有の食ひ方であらう。正月のゞの内の長閑な日に炬燵に暖り乍ら來客と相對してあつい甘酒をすゝつたり此味噌餅を勸め

られたりするなぞ、丹波らしい情緒があるのである。

北極星

澤田四郎作

滿洲に來て、まづ第一に感じたことは、澄みきつた空の美しさと、燃ゆる樣な夕日の映えである。赤い夕日は小學生の頃から歌つてゐた軍歌からその感傷を味つてゐたが、空の美しさが、これほどまでのものであるとは全く夢想だにしてゐなかつた。わけて夜の空の美しさは實にたとへ樣のないものである。內地の都會での生活では、全く見うけられなかつたいろ〳〵の星がまるで寶石の樣に大空に懸つてゐる。子供の頃、田舍の村里で仰いで見た北極星は、遙かな北の空に輝いてゐた筈だのに、此處で見る北極星は、頭を後ろに反して見る高さに懸つてゐる。この驚きは地圖を擴げて見ればわかる樣に北緯で十五六度も北の方にゐるからである。われ〳〵はこの北極星を高く頭上に仰いでみて、しみ〴〵とはるけくも來つるものかなの詠嘆を久しくしたものである。ある年の秋私はある用務を帶びて更に北方に當る地點へ出かけた。百何十粁を自動車でドライブして行つたが、曠漠たる枯れ野の涯は際限なく續いて、地平の涯の靑空には白い雲が湧いてゐた。こんなに北に走つてはソ領に飛び込むんぢやないかと案じたが、漸く薄暮に至つて目的地にたどりつきやがて夜を迎へた。夕食に腹をふくらかせた自分は、放尿のため戶外に出て、實に澄み切つた空を仰いでびつくりしてしまつた。といふのは北極星が、ふんぞりかへつてみねばならぬ天空に發見したからである。自分の判斷では、頭上を越して南の天空にある。はてな、あまり北の方へ來たのでとう〳〵北極星の下を通り越して來たなと、天文學上の大發見の衝動が、長途の旅をねぎらつて下さつた隊長殿のおごりの酒に頭が混沌としてしまつて、故國の子供に北極星の下をくぐつて來た感激をヘガキに書いて寢てしまつた。翌る朝、起きて洗面に戶外へと出てみると、はて不思議や、大きな太陽が、今しも西の丘陵からしづ〳〵と上つて來られるところである。はてなと意識をとりもどしてみると、昨夜の大發見は、方角違ひの一つの錯覺に過ぎなかつた事が判り、急いで子供への葉書を破りすてたことであつた。

人間は生れた故鄕の方位方角は間違ふ事はないが、見知らぬ土地へ汽車や電車でぐる〳〵と旅をしてゆくと、いつの間にか方角が判らなくなる事が多い。私は中學の四年の時に畝傍中學から郡山中學へ轉校したのであるが、南に向つて入る中學の正門が西に向つて入る樣に思へて、どうしても正しい方角を信じる事が出來なかつた。體操の折に右向け左向けでは間違はないが、南向け西向けの號令になると、たゞ一人とつ〳〵と反對の方に步るいて行つて笑はれた事が再三ではなかつた。しまひには體操の時間が苦になつた事が今思ひ出されて來たが、滿洲に來ても、折々行く大都會でも方角が違つて實に憂鬱である。磁石で是正してくれる方角の智識も一向に役だたない。

東京での學生生活時代の見聞では、道をたづねる場合に東京の人は必ず右・左の言葉で敎へてくれるが、關西地方の老人達は東西南北の言葉をもつて敎へてくれる。この相違は、換言すれば方角違ひの錯覺を全く考慮してない言葉であつて、右、左は、方角の錯覺といふ事を考慮しての言葉であるからである。發生的には東西南北の方位を用ふることが古く、左右の言葉を以て示すことが新しい樣に自分には思はれる。故鄕といふ土地を離れた人間に始めて必要な方角の敎へ方であるからである。

見知らぬ土地に始めて到達した中の第一印象ともいふべき方角が間違つてゐて、その土地の人から敎へられても、すぐに納得されぬのは私だけでろうか聞きたい事である。最近移り住んだこの土地でも、私は毎日西の空から太陽が上り、東の空に沈むといふあぢきない月日を送つてゐたが、最近暫くこの地を離れて、久し振りに歸り、列車が停車した瞬間、やつと方角が正しくなつたと喜んで、デツキに立つて、驛の建物を見た途端に、宇宙がくるりと大きく廻轉した樣に思はれた瞬間又もとの方角違ひにまひ戻つてしまつた。（一八、二、九）

山の横文字

安川久留美

私らの子供の時分にヒーローといふ兩切の卷莨があつた。七尾線の汽車の中から遠く向山を見た時、そのヒーローの文字が大きく横に廣告となつてゐたもので、無論タバコは民製時代であつた、その頃母や祖母は「二羽鶴」といふ刻みを吸つてゐたが、夫れは今の「はぎ」位の程度の品だつたと思ふ、偶々北海道から歸鄕する父は大抵、金天狗だとか銀天狗だとか、その頃旺んに賣れた、天狗名稱の莨を愛喫してゐたものである、二十本入だつたか、五十本入だつたか、羽團扇意匠の靑い袋が淡い記憶となつてゐる。

ヒーローは今の金鵄の如く上下共に大衆的賣れツ子の一つだつたが、この他にサンライズなどゝいふやゝ高級的なものもあつた。

父の使ひで安江町の店へ天狗煙草を買ひに行つたのは四十年以上の昔語りである。細卷の天狗莨を父は一日に一袋立どころに吸つてしまつたが子供心にそんなにおいしいものか？と思つてゐたものである。母の吸ふ刻みの「二羽鶴」も何處かの袋に赤と靑の二度刷りの松と鶴の畵がかゝれてゐた。その他にも未だ高級なものもあつたらうが、お使ひ

をせなかつたから、その名稱をおぼえてゐない、たゞ老も若きも猫も杓子も彼の十本入の「ヒーロー」を吸つてゐた、値段も一つ三四錢だつたか、それすら忘れてしまつた。何しろ明治の中頃までは卷烟草を吸ふ人は生意氣さうに見られてゐた時代であつた、ヒーローも岩谷天狗もどんな味だつたか、その頃未青年の私らには皆目知るわけもないが、父のくゆらしてゐる白い煙りから天狗が夢のやうにほうふつとして現れて來る感じがした。民製から官製へ移つたのはいつだつたか知らぬが、現在ある卷烟草の中で「椿」と改稱したカメリヤなどが最も古い歴史をもつ安烟草ではなからうか、私は汽車の中から向山を見る時いつもヒーローの文字を想起して八ツ九ツの幼年時代を想起する。

（二月十日）

語源覺書（三）

淺田一

左右。 右は昔ミギリと云つた。マガリの轉だといふ説や「握り」の轉だとする説（新村博士）などある。水限砌で説く（松岡靜雄氏）に至つては我々には判らぬ。恐らく弓に關して生れたコトバであらう。左はヒタ（直）といふのも弓でなら判る。之はヘタ（下手）と關係があらうとは新村博士の説だが佛語 maladroite を聯想されたものであらう。弓は太古から我國に用ひられてゐたからニギリ、ヒタとして右左を區別したことが推測出來る。獨語の右は recht だが之はラテン語 regere-rectus から來て居り英語 right も之で「伸ばす」「眞直」の意から出で日本と全く逆である。左に盾を持ち右に劍を持つて之を伸ばして攻擊する昔の埃及や希臘の繪を見れば成程と會得出來る「伸ばす」から「支配する」となり、支配者や權利といふ意味を生むに至つて居る。之に di がつくと direct（直接）となるが、之が伊國で diretto 又は dritto となり、依然「直接の」といふ意だが更に佛國に入つて droit となり、「直接」の意は失はれ「右」及「權利」「法律」の意味として用ひられてゐる。獨語左は link でラテン語 languere 弛むといふ意、英語 left は「放置された」の意、佛語 gauche（ゴーシュ）は本來獨語でホトトギスであり之が姦婦の夫の意となり、「間抜」と轉意して佛に入り「ブキツチョ」となり「左」となつたらしい。支那、朝鮮、アイヌ、蒙古、西藏などの右左は日本語とも歐米語とも全く緣の遠いものだから茲に説くのは止さう。

頭。 希臘で kephalos だがマライで kepala といふのは偶然の一致であらうか。ラテン語で caput といふのも希語と關係があるが、之から伊語 capo 佛語カベサとなり何れも頭を示すが、英語 cap となつては頭には關係があるが帽子となつて行く。獨語コツプも頭だが、Cが屢々Hに變じ獨語 Haupt は頭でもあり長（ラサ）の意でもある。之より蘭語 Hoofd 英語 head となり頭を示すが、又獨 Hut 英 hat は帽子を示す。ラテン原語から隨分變轉してゐるが、之でも語源學的には承認されてゐる。之より我國のカブリとかカブとかの方がラテン原語に近い位に思はれるが偶合だらう。頭を傾けるのが古語でカブス又はカブクであり、冠木門、歌舞伎は之より來たとは新村博士の考證である。蓋し度外れのオシヤレや放蕩者をカブキと云つたらしく、延いて役者となり演技にもいふ樣になつたらしい。被（カブ）る、兜などもカウベもクビも此カブから轉呼されたものであるまいか。アタマは朝鮮語ウト・ムリからオツムリとも なりアタマとも轉じ、又オトナ（乙名、大人）とも轉じたらしい。（中島利一郎氏説）ロシアでコサツクの首長をアタマンといふのも日語系であらう。カシラの方は印度語でカスが頭カスラーは皇帝で、Kは屢々HやPに變じ新羅でパシヤは首長で、トルコでもパシヤは今も將官を意味し、マライではメツカに參詣した人がハヂといふ稱號を受け、滿洲女眞では酋長をハチと稱し、日本もアタマのハチとかハチマキとかいふ。カシラは之等と一脈の關係があり、KがHに變じてハシラとも云ひ、之は神樣や英靈を數へる時に幾柱といふ風な表現をする時に使はれてゐる。（カシラは凡て中島氏説）伊國で頭は testa 佛國に入り tete となつてゐるが、原語はラテンの testis（證人）から來て居り、同じ原語が英語では睾丸となる、蓋し生れた時之があれば男兒として親が喜ぶからだらう。

新發賣
消炎鎭痛濕布藥
粉末エキホス
主治効能 感冒、肺炎、肋膜炎 氣管支炎、扁桃腺炎、中耳炎 ロイマチス、神經痛、打撲痛 捻挫等
今般エキホス姉妹品として發賣したる本劑は專らその藥効效に持續時間の永續に留意して製造せるものにして用法も至極簡便、安全なる粉末濕布藥なり
一、本劑は長時間使用出來るやうに工夫してありますから持續時間は任意にして支差へありません
包裝 一〇〇瓦 二五〇瓦 五〇〇瓦 一瓩
エキホス姉妹品
C-PE19

川柳の近畿 大和篇（九）

麻生路郎

（三）長谷寺

★長谷寺は關急電鐵の長谷寺驛で下車すると、すぐ向ふの山腹に見える。新義眞言宗豐山派の總本山で寺號を豐山神樂院長谷寺と稱へ、末寺三千有餘を有してゐる。西國三十三所第八番の札所として知られてゐる。詠歌は「いくたびも參る心は初瀨寺山も誓もふかき谷川」である。

★寺の創建は天武天皇白鳳元年となつてゐるが、同天皇の朱鳥元年に飛鳥弘福寺の僧道明が開いた寺である。寺傳によると聖武天皇の勅願で僧德道が近江の國高島郡から得た靈木で十一面觀音を作らうとしたが、其の費用がないのでそのままになつてゐたのを藤原房前が大和班田使として巡視した際、德道からその靈木の由來を聞き、房前が朝廷に奏して三千束を得、現在のところへ堂を作つて神龜四年に竣工したのだと傳へられてゐる。そして道明の方の開いた方を本長谷寺と呼んでゐる。

★本尊の十一面觀音を刻んだ靈木の由來といふのは、昔大出水の時に近江國高島郡へ大きな木が流れついた。ところがその大木の流れついた土地には必ず疫癘が流行したり變事が起るといふことを大和國葛下郡の出雲大滿といふ者が聞いて、それはただの木ではなく靈木であらうと云つてそれで佛像を作ることを發願し、その木を大和の當麻鄕の川邊まで運んだが、その意を果さずに死んでしまつた。それがために、當麻に疫癘がはやり出したので村人が更に川上の長谷川のあたりへ棄てたがその後、藤原房前鄕の奏請によつて、神龜元年三月、香稻三千束を下行せられることになり、僧德道が其の靈木で本尊十一面觀音の像を作り、神龜四年に出來上つたのだと云はれてゐる。

★長谷寺の緣起にはいろいろと異說があつて、本長谷寺後長谷寺のことが、隨分こんがらがつてゐるやうである。尤も草創時代のことはたしかな文獻のないかぎり異說續出は長谷寺にかぎつたことではない。それに度々の罹災で本堂は勿論本尊まで燒失してゐるのであるから無理もない話である。內陣に安置してある高さ二丈六尺七寸の本尊十一面觀世音菩薩の立像は天文五年の燒失後に東大寺の佛工良學等再興したもので、本堂は長く假堂のままであつたのを天正十六年に再建、次いで正保から慶安にかけて改造した現存の本堂に安置されてゐるのである。

★初瀨町は山と山にはさまれ、初瀨川に沿うた帶のやうに長い町であるが、長谷寺のために出來た町である。參急橋を渡つて町を東に上り詰め興喜天神を少しく左へ折れて進むと仁王門が見える。仁王門の內はゆるやかな三百九十九段の石階を覆うた百九間半の登り廊下で、その下段を十二三歩行くごとに、結晶形をした銅の燈籠が下つてゐて夜の參詣者にほのかな光りを投けてゐたが、これも金屬回收で應召し、今は裸電燈となつてゐる。そのうち木製のものがつくられるかも知れない。南都春日社司中臣信淸が惡瘡に惱む嫡子信近が救はれたので觀音に報謝するため長曆三年の四月に「九十九間の登廊」を造建したのが嚆矢であると云はれてゐるが、淸少納言の枕の草紙に「くれはしを登り困じていつしか佛の御顏をおがみ奉らんと局に急ぎ入たるに」とあるのは信淸の登廊造建よりも以前のことであるし又春記永承七年八月の條に、天慶七年燒亡の時には旣に本堂に通ずる廊があつたことが記されて居るので、この登廊は長曆以前から存在してゐたのではないかと云はれてゐる。しば〳〵罹災して最後に德川家光が再建したが、明治十五年に中下兩段が火災に遭ひ、明治二十七年に再建したのが現在のものである。この廻廊は上中下の三つに稻妻形に折れてゐる。下の廻廊の左右は有名な牡丹園になつてゐる。元祿十三年廻廊の兩側に移植されたのが初めで百五十種三千株、紅白紫紺、色とり〳〵で五月頃には隨分の人出である。

信心でないのが牡丹折りたがり　路郎

その右側のかかりに、開山德道上人の師の道明上人の靈塔がある。廻廊が東へ曲折するところに無明の橋があり、その傍らに天狗橋がある。そして中の廻廊を登りつめたところに藏王堂がある。ここで廻廊は又北に轉ずるが、その右側に、「人はいざ心もしらず古里は花ぞ昔の香に匂ひける」で知られた紀貫之の古里の梅がある貫之は幼時敎へを雲井坊に住んでゐた叔父の淨眞についてうけ、長じて京に出たが、後この地に遊んだ時、淨眞は曾て貫之が植ゑておいた梅の花を手折つて示したところが貫之は早速右の歌を詠んで感懷を述べたと傳へられてゐる。古川柳には

百人が言葉もかけぬ梅の花

や

初瀨の旭の梅に目を射る

などがある。貫之の古里の梅を詠んだ句である。

★上の廻廊を登り詰めてすぐ左が本堂になつてゐる。本堂は南向きで間口十五間、奥

行十四間半、その前に舞臺があつて初瀬の町を一望の下に見下ろし、頗ぶる眺望に富んでゐる。見渡すと向ひは化粧坂、與喜天神の山に三燈の峯初瀬川は底を流れてゐる。

★長谷寺の寶物で國寶に指定されたものでは地藏菩薩木像、十一面觀世音菩薩銅像、不動明王木像、彌陀來迎圖、銅盤法華說相圖、淨土曼陀羅圖、寫經及經筥等がある。殊に銅盤法華說相圖は奈良朝前期の作で銅造鍍金、竪二尺七寸五分、横二尺四寸七分、厚さ一寸、銅板浮形の本體に押出しの千佛を打ちつけ、別に塔の初二層中の小佛像は浮彫の小板をはめこんでゐて、鍍金は微かに殘つてゐる。造立時期の古さと精緻を極めた鑄銅の上りとで我が國美術史上貴重な遺品であり、長谷寺創建の鑰を與へるものだと云はれ歷史、信仰、美術の三方面から絶大な價値を有し全く稀有の寶物とされてゐる。

★舊曆の一月八日から修二會が十四日まで行はれる。結願の十四日の日はダダオシ（追儺會）で大變な群集である。開山の德道上人が閻魔の廳で授けられたといふ寶印を信者に頂かせることになつてゐる。夕刻から鬼追の式がある。

★又、長谷寺創建以來の年中行事の一つに、「一匣べつたり」といふ奇體なお祭がある。この行事は殆んど世に知られてゐないが、舊正月の六日即ち修二會の始まる二日前に、昔の泊瀨の里方と白河の村方とが、年番交替で頭役と迦如來の御座所になつてゐるのであるが、今ではお祭の本尊はお釋迦さんではなく、その脇に安置してある老婆の坐像なのである。總代達はこのお像に、持參の新衣を被せ、その一人が匣入の白粉を、底をたたいて片手に盛り上げ、お面の眞ン中に、パッと塗り引き具し、席について所定の法要を修し、最後に忝しく寶印をお像に加へ、次いで參列の一同に頂かせて引き退くのである。修二會の序奏のやうなこの行事が何んのために行はれるのか寺では判らないらしいが、次のやうな云ひ傳へと照らし合せて見ると頗ぶる興味が深い。

★そのむかし長谷寺創建の頃、多數の人たちの賄ひを一人の老女が、一手で運んで來て、日日不足もなければ餘分もなかつた。その上に、この老女は非常になさけ深い人だつたので、諸人から慈母のやうに慕はれてゐたが、ある日の夕から老女の姿がふつと消えたやうに見られなくなつた。しかしその素性も知らなければ家里も知らなかつたので、行方を尋ねることも出來ず、村人たちの失望は大きかつたが、誰云うとなしに、あの老女は觀音菩薩の化現に違ひない、それにつけても御恩を忘れてはすまないと云うので、あのおたしなみの晴衣と白粉をせめてもの志としやうといふのが、このお祭の起因であるといふのである。

燈籠勵召創の　長谷寺の廻廊　岩田清氏畫

一匣べつたり白粉やけを

しまさおや　路郎

★八月の長谷踊（盆踊）もなか〳〵盛んである。

★仁王門から右手へ折れて少し行くと小學校跡がある。そのすぐ上に、定家卿の墓と俊成卿の碑がならんでゐる。ふたもとの杉は其の横にある二本の杉で、「源氏物語」や謠曲「玉葛」から出た名所である。源氏と夕顏の間の女である玉葛内侍の亡靈が初瀨川の邊にあらはれ昔此の地で母の侍女であつた右近に邂逅した事の物語が謠の筋である。連歌橋を渡つて半丁の上に玉葛の墓がある。

川柳塔

＝路郎選＝

昭和十八年元旦（二句）　兵庫縣川西町　戸倉普天

頑張らうそうしませうの屠蘇を酌み
東方遙拜それから小さい雑煮なり

伊勢神宮參拜

五十鈴川にそゝぐ赤子の氣は一つ
値上げ發表煙草屋何でもあると言ふ
古陶展番頭袴で受附けし
もんぺいを勸めりやよそ行きこしらへる

大東亞戰爭美術展覽を觀る　尼崎　水谷鮎美

敵都炎上兵たくましくこちら向き
黎明の露營の靄か煙草喫ふ
ブキテマの火炎に光る日本刀
神兵の手の拳銃も火を發す
ふるさとに似た山機銃掃射する
最後の日敵屍の横の合言葉
天覽の聖畫に佇てる傷痍章

二月五日誕生日（二句）

配給のお酒がうれし誕生日
丹前のちとよごれてる誕生日　尼崎　奥村丹路

襟たてて私慾のふかさ思ひゐる
俗事とは思はぬ回覽板をよむ
おちつかう冬の灯しのあたたかし

休閑地利用

言ふは易し人糞尿の飛ばつちり
子を負うてその重たさを嬉しがり
人手不足父立ちあがることになれ
前大戰のドイツを夫婦語合ひ
やがて春がくるよと妻をうなづかせ
ゐびすばし川は流れるともなく流れ

張家口　岩崎柳路

年頃は金魚のやうな帶を締め
病院の廊下何日かの妓と出合ひ
古風な型の馬車で北京を走る也
女巡査に調べられてる北京站

★

大阪　岡島嶺泉

股火して陣頭指揮が執れるかい
殘り福戴きましたと醉うて去に

川口　伊古田伊太古

春の日を一寸めつけた垣の下
一高の下駄の鼻緒に犬も逃げ
西新井厄は無けれど初詣り

大阪　木下幽王

統制が亭主を世帶染ましてる
カロリーがどうのこうのと干バナナ
遠慮せず食へと云ふのも鄕里のこと

川柳類題索引（8）

川柳雜誌自一號至二一五號

▼題の配列はすべてABC順、題の下の日本數字は「川柳雜誌」の號數で、算用數字は其の號にある題の發表ページ數、例へば轉寢四（18）とあるは第四號（第一卷五月號）第一八ページに轉寢の句のあることを示すのである。

（一）人情、風俗、人事、身體、病氣（8）

U

轉寢　四（18）　四八（69）
一八（20）　二〇（33）
噂　五（12）　四七（41）
一五（47）　一九（24）
一九（17）
嘘　一六（12）　四三（52）
五三（33）　五九（4）
薄着　一九（26）
浮氣者　一七（11）
賣切れ　二一（10）
占ひ　三五（22）　五一（52）
賣上げ　三六（61）　一三九（58）
腕まくり　四〇（33）
賣出し　四四（55）
梅見　四八（66）　一八二（16）
自惚れ　五一（15）
嬉　五五（54）　五八（39）
受付　五八（50）
運命　六〇（51）
八二（40）　一八三（16）
三二（31）　三二（33）
腕　一〇三（52）

青春をつゝむ軍服卷脚絆
雪降れば貧民窟も繪畫めき
組合で元祖もイロハ順にされ
文化生活に麻痺してるから出る不平
過渡期だからと客に淋しく笑つとき
大阪 福田安夢

俺がいゝ手本ぢやないかと先輩の
大阪 須崎豆秋

ソコマメへ騷いでくれるとなり組
臥て居れず八日の旗は立てに起き
ハワイの柳友を憶ふ
一浪さん叩かれてなど居はせぬか
ハイラル 宮岡白峯

不寢番又擧手の禮擧手の禮
軍用車また國境へ近づけり
松本石曾根民郎

古きより信濃人は尊王の精神を培ふ
尊王を繼ぐかむかしの山すがた
天龍峽畔にて
民藝の夜話へさわ〳〵めぐる葦
同輩しきりに轉業に擬身す
轉業の榮えを擔つて莫喫ふ
差の一年祭近づく
ひとり減る膳いたづらに父は老ゆ
大阪 正本水客

婦人服おとこに頼るまいとして
性兇暴放浪性あり十六才の少女
雨の降る日を子供三人泣きやまず
大東亞戰爭美術展覽會(三句)

鐵條網に挑む兵、兵、兵の顔
出帆へ從軍看護婦若く立つ
いばらの道と云ふもおろかや兵すゝむ
豐中 黑川紫香

帶の音させて夫人のまた出かけ
耳元で話すは小さい金の事
値上した一日丈けの禁煙か
口笛は陽射しの坂を下りて來し
谷一つ隔てた山の隣組
結局は大きい鯉に麩をとられ
霜やけの手で辻占をつき出され
あくびする犬を見てゆく郵便屋
應接で時計のねぢをかけて待ち
首筋の雪がとけこむ靴磨き
大阪 丸尾潮花

安來節勝つてる國の有難さ
長谷川だ五十鈴だなぞと嫁き遲れ
一合の酒を舊友ゆずりあひ
殘置燈妓の影を見逃さず
女戸主また番頭に先きだたれ
叔母ちやんをマダムだなぞと呼び馴れて
大阪 北川春巢

空想の飛躍と別に微熱出る
長男出生(六句)

產褥の妻の寢顏の美しし
二太郎を隣組から羨まれ
しつかりと泣いたを產婆云うてくれ
ダンシアンザン受取る母の瞳を思ふ
上の子のおしつこさせる父となり

愁ひ 一三(48)
運勢 一八二(17)
動く 一八二(16)
後 一八五(16)
うるさ型 一八六(16)
後姿 一九二(25)
腕前 一九五(17)
移り氣 一九六(18)
上役 一九七(22)
產聲 二〇二(22)
有頂天 二〇六(32)
美しい 二〇六(33)
內祝 二〇八(33)
賣喰ひ 二〇九(35)
うす笑ひ 二一(30)
疑ひ 二一(31)

W

若 五(14)
忘れ物 九(14)
若盛り 一六四(34)
割前 三三(33)
若死 三四(32)
笑ひ 四六(53)
四九(58)
五〇(52)
五五(53)
一八二(16)
一八九(18)
二〇五(33)
二〇六(34)
二〇七(32)
二〇八(33)
二二三(33)
別れる 五〇(54)
若返り 五三(48)
若侍 五九(43)
腕力 一五七(40)
別れ 一九一(17)
一九二(19)
割込 一九二(23)
我儘 一九二(24)

どつちにも似てゐると云ふ産見舞　大阪　尾崎方正

倒しまに落ちる姿でパーマ行く
大御心に應へまつらむ鍬をとり
持つものを持たず噂に椅子が搖れ　下關　櫻川不水

産まぬ鶏賣つて氣のない日が續き
鰹節配給女三人鋸に出双
鶏小屋で干からびた糞又さびし
安き日は蠟燭の灯に風もなし
賣る者の強さは賣らぬ武器があり　廣島　濱田久米雄

恙なく防空幕の色が褪せ
職域へ行く靴音も氷つてる
事務室に咳一つなき大戰果　大阪　中内翠芳

制服もシルクハットもお正月
ガタゴトと開かぬへ家賃集めに來
本宅の話しをすればムッとなり　下關　多田市多樓

日だまりの此處も隣保班の畠
日々多忙われ農村の子に生れ
春の海月にならんだ輸送船
膝に子をのせて戰地へ書く慰問
大阿蘇は冬へさからうやうに燃え
郊外はお伽の國に似て靜か　大阪　夷一笑

古手紙みんな火となれけむとなれ
合成酒色にかわりはなかりけり

しる市を出てからマスクかけなほし
やつれたらやつれたで又うつくしい
大阪の隅に居ります世帶證
嫁かず後家ころもの袖を切りをとし
疊がへあとのほこりの焚火する
みづ洟をきようにふいた話ずき
あの頃は純情無垢な寫眞帳

早朝耐寒訓練參加

ねぼすけの異名返上仕る　大牟田　高田抱逸

持前の自尊心から土地を賣り
借つて建てゝ今更利子にいきづまり
日蝕へおてんと樣の謎を聞く

米漁りの人か

こぼれてる米の注意へ振向かず
厄年を憂ふる人の酒豪にて
玄米を食つて作戰恙なし　下關　國弘半休

野に山に銃後を脊負ふ足の巾
禁煙を氣の毒そうな目でみられ
水道の水がチリ〳〵出る寒さ
田舍から來た兒みかんにふりむかず
增産へ祖母を殘して鶏がなく
債券を數へてもみる決戰下　西宮　阿萬万的

大東亞戰爭美術展を見る

魂が擊つ硝煙のまだ消えず
魂だけが生きてる兵の眼の光り
顎紐かけて立てば待機と云ふ姿勢

笑聲 一四四(一八)
悪口 一五五(一七)
若毛 二〇一(二一)
我輩 二〇三(二二)

Y

湯上り 九(一四) 三五(一二)
一五一(四四) 一八七(一六)
夜櫻 一五五(二〇) 五三(五三)
幽靈 一八(一四) 一八三(一五)
一九一(一八) 二一三(三二)
行末 二一三(一三) 五三(五四)
七五(三五)
嫁入前 三三(二三)
厄年 三五(一一)
約束 二八(二七) 三五(一一)
四〇(三二) 五九(五二)
一八三(一六) 一九四(一八)
一九六(一七) 一九九(二三)
二〇三(一八)
三三(三二)
溶 三五(三四)
呼び捨て 三六(二四) 一八六(一七)
夜學 三六(三五)
喜び 四〇(三〇)
野暮 四〇(三一) 一九六(一六)
豫定 四三(五二) 五三(五三)
宿替 四三(五三)
世渡り 四四(五四) 四六(五三)
慾 四八(七一) 五七(五二)
二〇四(三七) 二一三(三四)
夢 四五(五三) 四八(六五)
五九(五三) 一八三(一四)
一八四(一六) 一八六(一七)
一九三(二三) 一九三(二七)
二〇六(三二)

尼崎　小林文月

一月中旬伊勢惟神道場の修養講習（二句）

若いのが舍内の水でみそぎする
あかつきの御幸大路に足揃ふ
靖國の神にあなたと小さく呼び

大阪　徳永雅美

頑是なし兵さえ見れば父と呼び
和装はしたゝり洋装はほとばしる
米英か獨伊か外人スパイめき
盗猫に又も配給してやられ
書割を持つて來たよな吹雪なり

西宮　谷口綠葉

桃割に餘裕を見せた決戰下
お稽古でお忙しいとかきれいな手
合併へ異議など申す暇もなし

大阪　武部香林

白濱點描

有り餘るお湯へ白衣をさらに見ず
不寢番星の動きを知つただけ
紺足袋を買うに電車の地下鐵の
貼りつけたやうに初戀塀に立ち
酒を止め煙草を止めて何をのむ
風呂好きも風呂の買溜とはゆかず

布施　上田翠光

神技悠々吹雪の空を守る音
大阪の雪は屋根だけ染めて行き
あんだけの雪で都會の子は遊び
鬪魂は盡きず軍刀手入れする
御器量が足袋の汚れを目立たせる

山口縣　河田一將

勳章がちよと妬ましい拜賀式
人道に翳せば悲し人柱

京都　明石柳次

英靈へ社長の頰はこわばりぬ
抱かれ來し遺兒の燒香へ目をそむけ
英靈へただ安かれとメガネ拭く
燒香の順を待つてる京の冷え
親子三人同じ文數の足袋をはき
メリケンを憎め怒れと記者歸る
鐵回收子に教へられるものがあり
地圖出して一人うなづく大戰果
氣樂さは鐘撞堂に鐘がなし

山口縣　長野井蛙

敵機なし空の護りへ並ぶ凧
君ケ代に羽子追ふ子等も駈け戻り
海苔に昆布土產の色も海の國

尼崎　長谷川三司

重役になつて白髮の艶をまし
滿員車どこかで葱の匂ひする
親として春の灯に買ふ貝細工
毛糸編む手をじつと見つめてなにもせず
英靈の列へ十二月の陽があたり

大阪　野元吐空

値上りの煙草握つて冬の街
海みえた車窓は神戸らしくなり

病み上り　四六(52)
火傷　四九(54)　一九六(14)
籤入り　四九(59)　五〇(53)
夭折　五一(55)
夜逃げ　五三(54)
夜遊び　五六(48)　一九三(18)
油斷　五九(43)　一九九(21)
安賣　五九(46)
湯歸り　五九(47)
指　七三(56)　八七(43)
一四三(52)　一八六(18)
一八九(19)　二〇一(21)
病　八五(36)
灸　一八〇(21)　一九一(16)
用意　一八一(18)
行先き　一八三(17)
破る　一八四(16)
宵寢　一八九(17)　一九二(23)
二〇五(34)
養子　一八九(16)
結納　一九一(18)
優勝　一九三(26)
喜ぶ　一九三(27)

醉　一九四(17)
痩せる　一九五(19)
横顏　一九七(22)　二〇六(30)
遺言　一九九(23)
躍進　二〇七(31)
友情　二〇九(33)
勇氣　二一一(32)

武玉川研究（一二八）

梅本塵山
森東魚
蛭子省二

五編（一〇）

（161）**百度參りの細長いかほ**

省二＝心配な祈願あつての百度參りだ。身神倶に疲れ、顏も痩せて細長くみえてくる。

東魚＝やつれた趣。丸顏にあまり哀れを誘ふやうなのは少なからう。

塵山＝百度を踏む時に數をとる、錢緡の細長いのを暗示したものらしい。

（162）**はしやく煙草の鐘へつく息**

東魚＝人を待つ趣か。長火鉢の傍の煙草は、乾きがちになつてゐるのに、まだ待つ人は戻らぬ。折からの鐘に歎聲を洩らすのであらう。

塵山＝鐘へつく息といふと、直に道成寺を聯想するが、煙草、鐘、つく息の三者が能く合致せぬやうに思はれる。

省二＝つく息は煙草にも鐘にも係つて居る事は判る。待人の句。

（163）**鷺と烏の意趣の有る貝**

省二＝黑白相反す。また倶に意趣ありさうな貝にも受取れはする。

東魚＝當人ならぬ當鳥同士は、別に何んでもなからうに。

塵山＝鳥のことではなく、碁敵であると自分は解釋する。

（164）**うつくし過て入れにくい傘**

東魚＝降りだした、雨に惱む人を傘に入れてやりたいが、美人なので、てれて入れにくい。

塵山＝雨中であるから、濡衣を着る慮れが有る。

省二＝美しい女は近づきにくいものだ。況んや袖ふれ合ふ傘の中へは入れにくい。

（165）**汲鮎や八百屋に蓼のほしい比**

省二＝四五月頃小鮎を網で採るのを汲鮎といふ。蓼酢で食べるのは珍味なものだ。

東魚＝何んでもない當り前みた樣な句だが、材料から初夏の爽快さはうけとれる。

塵山＝材料の配合は、當を得てゐる。

（166）**禿の十五正月を見す**

東魚＝十五ともなれば、もう新造として出されるやうになるので、呑氣に正月を遊んでゐられないと云ふのかと思ふ。（勿論、十五と限つた次第ではなく、十三四からでも新造となるものもあつたらしい。）

塵山＝遊び盛りの年齡に、正月を仇にに暮するのも籠の鳥の苦惱である。

省二＝「年越に十二の禿なぶられる」の句もあり、もう十五となれば、正月は一層忙しくなる。

（167）**青柳やあミ笠ほとハ日を通し**

省二＝青柳の風情を詠むだもの。青柳の垂るる間から陽が透け洩れるのを、編笠の目からそれに譬たもの——編笠とは見つけどころが細い。

東魚＝春の日ざしの青柳の糸のあひを洩れる趣。編笠ほどは中々面白い。

塵山＝清新の風趣が表現されて、吟誦に價する佳句である。

（168）**夜明の坐頭蚊か吸て居**

東魚＝夜を徹した疲れのさまが思はれる。蚊を追ひもせず、轉寢をしてゐるのであらう。

塵山＝此の坐頭は按摩でなく、音曲を善くする者と解してみたい。

省二＝「夜明け」で、一層哀さがます。

（169）**開惚のする雪うちの聲**

省二＝障子を締め、部屋できいて居る。雪打（雪投げ）をする者の掛聲などが、何んとなく可愛らしく感ぜられる。開える。

東魚＝若い女連が興じてゐる趣であらう。

塵山＝少女ではなくて、美少年ではない歟。

（170）**本服の禮に歩行ハ最ウ惚て**

東魚＝美人病み上りは、一層美しい。「惚て」と云つても讃美する程の意であらう。

塵山＝俗に惚れ〳〵するといふ意である。

省二＝美人が患ふ事には、一層同情させられる。それが全快したのだ。惚れ〳〵させられる美しさがあらう。本復が正しいと思ふ。

(171) **素湯を呑顔の哀な鉢扣**

省二＝空也忌から四十八ケ日鉦を叩き、洛中洛外の茶毗所を廻る。寒い最中の事とて、素湯を呑み僅に暖をとる。修行とはいへ哀れに感ぜられる。

東魚＝素湯だけに趣もあり、哀れさも深い。

塵山＝水涕も垂るであらう。

(172) **凡夫さかんに丸くなる撥**

東魚＝撥の角が丸くなる程、時もたち數も彈きしたので、遊蕩客の絶えざる太平の有様を云つたのであらう。「凡夫盛に」は遊蕩の客をさすものと考へる。

塵山＝顧客は凡夫に相違なく、名僧智識のあるはずが無い。「凡夫さかんに神祟りなし」と云ふ諺が有るけれども、それには無關係らしい。

省二＝お說通り。然し一寸難しい句。

(173) **信玄公と遣ふ柿うり**

東魚＝信玄「も」かと思ふが、原本手元になく、疑を存して置く。柿賣は間諜に入り込ませたのだらうと想像する。柿は甲斐の名物である。

塵山＝原本にも「信玄公と」とあるが、「も」の誤寫に相違無い。

省二＝謙信が鹽を送つたのも、間諜策略があつたのだと、說いて居る人がある。——信玄「公」と用ひたのは、七言にする爲に外ならぬ。『信玄公は名將と借りたやつ』(古句)とは場合が異なるから。

(174) **草餅を燒く新らしい顔**

東魚＝出代つた新顔の女中が、草餅を燒く。

塵山＝雛祭の草餅が數日を經て、固くなつたのを燒くので、それは新出代り女の役目である。

省二＝「新しい」で出代りが判る繼つて居る句。

(175) **氣違の見ると飛つく伊達道具**

省二＝豪華な警固の伊達道具をみて、狂人は飛びつかむとする。そこが狂人である。

東魚＝華やかなさまに、狂人の目がつき易いのであらう。

塵山＝正氣の者ならば、路傍に踞まる。

(176) **ふところにいけまし〳〵と馬のふん**

省二＝化されてゐるのではないか——他解がありさうな氣もする——「いけまじ〳〵」は生ケ眞面々々。平氣な顔。

東魚＝夜遊びに家をあけた言譯に化かされた振りをして、馬糞など懷中にし、戻るのではないか。(「八笑人」などにあつたやうな氣もする)

塵山＝「いけ」は、他を辱しめ罵る意の語で、生け太い奴、いけ騷々しいなどと云ふ。

省二＝「いけまじ〳〵」と云ふ言葉から、夜遊說面白しと思ふ。「いつそ馬糞にしようと朝歸り」、「居續の歸り馬糞をみやげにし」などの古句もある。

武玉川研究正誤表(二二九號)

(頁)	(段)	(行)	(誤)	(正)
二	一	十七	大つゝみ	ミ(原本)

慰問袋を
戰線の勇士へ
きつと喜ばる
大鐵百貨店

彼を見て我を思ふ

靜觀斷行の樣として諸家の聲を聽く
—編輯局—

○ 沖野岩三郎

友人に美校出の碁の二段の男があつた。繪をかかないで碁ばかりうつてゐたが、此の男は頗る面白い男で、何を言つても、世の中を何にたとへん飛鳥川……といふ文句で片づけた。金が無い。世の中を何にたとへん飛鳥川。誰が死んだ。世の中を何にたとへん飛鳥川。男の子が生れた。世の中を何にたとへん飛鳥川。汽車の時間が變つた。世の中を何にたとへん飛鳥川。今年は實に寒い。世の中を何にたとへん飛鳥川。といふやうな返事ばかりする男であつた。學校を出ても歸らないので、父が心配して、チチヤマヒスグカヘレと電報を打つと、其の返事に、イツカヘルカ、アテテミヨ。

○ 頴原退藏

この頃チンドン屋が一向來なくなつた。彼氏も軍需工場あたりでお國の爲に働いて居るのかも知れぬ。それにしてもいつものチンドン屋が來ないのは、自分にとつて少々淋しい。あの足拍子面白いチンドンの音が聞えて來ると、私はきまつて書齋の窓からそれを眺めるのである。飄々として何の屈託もない彼氏の風丰を見て居ると、不思議に自分の心の中の小さい欲望などが一べんで吹きとんでしまふのだ。

○ 福田山雨樓

ある夏、西鄕隆盛にお召しがあつた。ところが隆盛は書生と二人暮しの簡易生活、生憎シヤツや褌を洗濯し浴衣一枚であつたため、すぐ出仕することも叶はず、その洗濯の乾くまで御猶豫を乞ふた、と云ふ逸話があるさうだ。いつも天を相手とした南洲、あくまで無慾だつた翁、容貌魁偉な隆盛——僕の老父が段々隆盛の顏に似てくるのは不思議だ——このごろ勤先に南洲でなくてはならぬほどに翁に傾到してゐる先生がゐて時々その逸話を聞かされるので、自分の青年時代から尊敬してゐたこの偉人を思ふや切。日常忽忙裡にある貧生、僅かに修學の資と致してゐる。

○ 夷一笑

彼は私の友人である。内へやつて來ると何時でも
「なんぞないかア」
とみづやを開けて菓子鉢のふたを取る、とつときの饅頭でも有ればべろりとやられる。又、食事中に來合せると
「僕も腹減つとんや食べるワツ」
と一も二もなく食卓に坐り込む。時には浪花節の出來そこないをうなる。又近所へみつともない程大きな聲でレコード歌手の眞似をやる。又ある時は夜中に戸をたゝいて
「今晩泊めてんか」
と云ふ。それ程明朗で不遠慮で正直で無邪氣な彼。どうしてもにくむ事の出來ないものを持てゐる愛すべき彼を思ふ時、薄情で利己主義でひねくれてゐる私がはづかしくなつて來る。

× ×

彼は私の友人ではない。一見して目から鼻へ抜けてゐると云ふ感じのする狡猾な容貌それだけでも親しみにくいのにたま〳〵話をすれば商賣に關した事にせよ世間話にせよ桁のはづれた大風呂敷をひろけるのである。彼と話をしてゐると何かえらい損をした樣な氣がする、そのくせしばらく姿を見せぬと不安なものを感じる。

どこ迄も虫のすかん奴として、しかも彼こそは私の望むところの强敵であると心にきめてゐるのだが最近私がまご〳〵してゐる中に彼はたう〳〵私の手の屆かぬ處迄行つてしまつた。けれども私はみじめな敗北を喫した感はせぬ彼と私は同年である。私には妻と子供がある。彼には其のいづれも無い。

人生はこれからだ、今に見ろ今に……とこれは私のまけをしみである。

佛印から

小川靜觀堂

第一信

御挨拶に上るヒマもなくして戰地へ來て仕舞ひました。相變らず御指導願上げます。

腦出して師走カンボヂヤの月を觀る

第二信

千古の謎、世界最大の石造建築たるアンコールワットを觀る櫻會を得ました。

神と共にクメルが捷つたことにする
水牛に途をゆづらせ馳りけり

○ 櫻川不水

蠻風を以つて鳴る熊本のK中學にKと云ふ恐らく未曾有であらう所の一大異人がゐた通學途上の彼の右腰には常に突拍子もない大きな面桶と昆布の出しがら見たいな手拭と

がぶら下り、左腰にはこれ又素敵な明治時代の目醒し時計がぶら下つてゐた。帽子は無論大破して黒髪天を衝き、爆破された様なズボンからは六尺の赤兵古帯が炎々火を吐いてゐた。これしきの事はまあその頃の中學生として再々見受ける事で敢て奇とするに足らないが、彼の劍道を見て私は驚いた。素面素小手を顧ひ出たが服裝禮式上許されなかつた彼の面は綿も衣もなく、蓬々たるジヤングルの如き髪であつた。小手又面影なく千切れ果て、胴に至つては全く言語に絶し隆々たる筋肉が胴の役割をしてゐると思へば間違ない程破れてゐた。これには劍道の先生も一本參つた。一通りの道具だけは付けてゐるので今更文句も云へず苦笑された。これでボン〳〵叩き合ふのだから壯觀と云ふより寧ろ悲壯であつた。そこへ行くと野球は大威張りであつたと云ふのは野球には禮式も糸瓜もない。彼は常に捕手になりマスクもミツトも何物もなく無論跣足で而も夏ともなれば例の炎々火を吐く六尺の兵古一つであつた（校内の練習試合）その頃のボールには鉛の蕊があり、現在のとは比較にならなかつた。

彼はよく我々の鐵棒へやつて來た。そして懸垂を片手で何十べんもやつて見せ、それが濟むと彼は鐵棒の上から、仰向け、腹這ひ、横倒しと凡ゆるポーズで地上に五體を投げ付けて見せ、その次が定つて校内の櫻の木めがけて一目散に駈け出し、所構はず身體をぶつ付ける事であつた。恁ふした彼のしぐさが我々一年生（彼は當時三年生）の絶大なる好評を博してゐた事は勿論である。又彼にはどんな喧嘩大將もどんな柔道家も一目置いてゐた。それはいくら毆つても彼には一向反響なく、いくら投げ飛ばさうとしても投げられない彼であつたからである

彼の身體は先づ中肉中ぜいと云ふ所で、一見スマートな學生であつた。然し一度彼が裸になるや、彼の隆々たる凡ゆる筋肉は鋼鐵の波となつて捻る様に思へた。その彼も幼年の頃は非常な腺病質で醫者も匙を投げた程であつた。その彼が或日鐵啞鈴使用を思ひ立ちて當意斷行し、爾來雨の日も風の日も一日とて休む事なく、堅忍不撓の精神を以つてやり拔いて來た賜物として健康無比の身體となつたのは當然である。その後今より十數年前の主婦の友誌上にK式健康法と題して麗々しく掲載された事は、讀者の或人には未だ記憶ある事と思ふ。

彼の素行元より奇人の域を脱しないかも知れないが、堅忍不撓當意斷行の精神は、以つて決戰下の現代若人を警鐘し得るであらう。

（船中にて、二・八）

新會員を募る

松坂倶樂部　川柳講座

▼戰時生活下の常識として川柳を知りたい人▼人間陶冶の詩として川柳を創作したい人▼從來作つてはゐるが、よい指導者がないので一向進歩しないと思はれる人々は▼松坂屋（日本橋筋三）の七階にある松坂倶樂部の麻生路郎川柳講座へ入會されたい。講座は月二回、第一、第三日曜日午後二時から新形式によつて開講（作句・添削批評講義等）會費一ヶ月一圓。入會希望者は七階の倶樂部受付へ申込まれたい。

（川柳講座幹事）

死か自由か ガンジー翁の反英抗爭

食斷

麻生路郎

★

今はは や印度を護る最後の手
戰術にしては斷食すねたやう
反英の僅にするラムネ水
三億の自由へ押しの一手なり
人道を無視し斷食續けさせ

★

世界歴史ガンジーが胃に蓋をする
信念のためには骨と皮になり
ガンジーは眠る印度の夜明け前

須崎豆秋

近作柳樽

路郎選

大陸は骨を埋めよと待つて居り　和歌山　宏方
或時は米も運んだ靈柩車　同
刑務所で餘生を送るとは凄し　同
住友さん十萬位端下錢　同
電話口舌を出されたとは知らず　同
火葬場で荷物のやうに扱はれ　同
今ならば點數も要る鎧なり　同
男なら兵隊ぢやがと二十一　大阪　美奈子
子を抱けぬ女夕陽を見てゐたり　同
元日に欲しがりませんを誓うなり　同
うちの人待つてる外を詩吟行く　同
今日の空未歸還ニュースへ青すぎる　同
ふるさとの星の綺麗な夜を憶ひ　中支　紅多呂
懐郷のマストの月へ一人たち　同
軍隊であつてよかつた夢がさめ　同
死ぬ迄に云はねばならぬ借りがあり　同
傾ひたまんまジャンクが今日も暮れ　同
一線に負けぬミシンを強く踏み　奈良縣　カズヱ
空想の中の自分は綺麗すぎ　同
何も彼も奪られた姿冬木立　同
貧しさに馴れて運命論者なり　同
母の手がいつち荒れてる瀬戸火鉢　同

車中にて

驚一羽一度穫る青田白く拔け　大阪　佳春

臺灣神社參拜

南進の基地の鎭めの大社　同

北投にて

藝姐（ゲートル）が欄で朗々流行歌　同
出來ぬ子が先にお役に立つ世なり　同
白痴美の女狐を背負ひ行く　同
擴聲機今横綱が負けた音　大阪　松南
貨物驛雪まで積んで來てるなり　同
表札屋蔣介石は書いてなし　同
牡丹雪鷄は卵を產んだ聲　同
初天神香具師の國策聽いてくる　同
奉仕への令嬢部隊テレもせず　東京　凡平
敢闘を誓ふ令嬢モンペ隊　同
令嬢は鍬をかついだ寫眞取り　同
煙幕は只宣傳の役に立ち　同
女工志望ですと返事もためらはず　神戸　小城子
タイピスト寄こて達筆けなしてゐ　同
國債を買ひに行く子へ連れができ　同
文明の利器の故障をもて餘し　同
後繼のない葬式は劇曲めき　大阪　葉光

新世界の火事

近火の屋根へ火叩きで立つ　同
陣頭指揮人形遣ひの苦勞知る　同
御安產祝ひの襁褓喜ばれ　同
この春をおめでたうではものたりず　岡山縣　蟻蜂
體あたり合掌をして讀み返し　同
少年の誓ひ首相もかしこまり　同
滾すほど酒もありたる服の汚點　同
奇術師がおや〳〵飯を食べてゐる　大阪府　夕紫男
日曜も働き定期むだがなし　同
太平洋の藻屑へ組んだ大豫算　同
盤上の殺氣兩棋士身じろがず　同
すきなひとあらいでかいと紅を塗り　京都　春渉
飯臺が机にもなる生活や　同
夕刊を見い見い飯をせき給ひ　同
乳房には勝てず子供を明けわたす　愛媛縣　曉明
さう言つておくと代理は逃げてゐる　同
電髮よ『ガ島』のいくさ知つてゐか　同
會つたから一緒に行つただけのこと　朝鮮　林業子
嫌味をば言つて心を慰める　同
送金の依賴ノートをさいて書き　同
勝閧はジャバやビルマを通りぬけ　西宮　萬龜子
女性開眼南の國は花が咲き　同
置時計戀の秘密も聞いてゐる　同
南方の資源へ伸せ卷尺を　臺中　武士
綴り方豐田正子に成りきれず　同
岡ッ引に似て興信所そッと來る　同

病床吟（二句）

院長もシヤベルは一寸もてあまし　大阪　寒浪

附添婦色氣あつてはつとまらず　同

産業戰士へ屋臺店

増産の　歸り嬉しく　明日へ呑み　同
辨當を　だきしめ朝の　月仰ぐ　尼崎　礎石
大陸へ　嫁く娘に母の　ヒナの軸　同
ぬるま湯をやつと上がれば停年だ　同
花代はあきれるほどの高さにて　西宮　寒草
新家庭　豫想以上の　赤字にて　同
小包で　送るといふは　洗ひもの　同
奉戴日　つゝましやかな　膳の上　神戸　治男
小使は　自分も歸る　鐘ならし　同
二十五になつても桃割れ結ってる　同
片假名が　讀めて喜しい　南の子　大阪　青々子
信越は　暮れるに早き　雪あかり　同
念のため言へば子供にいやがられ　同
年頃の　帶きつちりと　盲なり　津山　菁紅
針の穴もどかしがつて老ひ給ふ　同
見返してやる氣の汗がしほ辛し　同
幼なじみ　もう二人共　いける口　大阪　春童
戀人は　徵用令で　行く若さ　同
ちぐはぐの氣持で夫婦家を買ひ　大阪　ひさみ
無軌道に書いて十錢貼つて出し　同
此の鐘の　手柄知りたい　村の人　朝鮮　丸太棒
四溫の日本町通へ出るとしよう　同
端然と　幼年學校　生徒乘り　大阪　三丸
少年車掌にたしなめられた出勤時　同
やもめもう子の辨當を握り馴れ　大阪　鷹丸

思案まだつかぬにつぎの見合なり　同
離愁の瞳　一本松が　走り去る　名古屋　秋暮
陶器店　冬の冷めたき　影を持ち　同
切り花で今日は白衣の兄と逢ひ　大阪　清子
鏡掛け　娘らしさを　まだ捨てず　同
産聲よ　七つの海をこえてゆけ　津山　蛙柳
大雪を　たねに日曜　起される　同
鉛筆で　ベリ島からの　便り來る　大阪　夏子
凡人と　言はれ洋書を　手放さず　同
部落出てこの酷寒を何處へ行く　滿洲　錦風

警備動務

寒月に　立哨(たつしう)む影ぞ　いとながし　同
嫁き遲れ世帶じみてるのに氣付き　大阪　秋子
讀みもせぬ本を一日抱きあるき　同
義足つけて歩くからだへ冬陽する　大阪　皷愁
看護婦の一人短歌も詠めるひと　同
戰時型モンペ同志で羽根をつき　尼崎　笑月
雜煮餅　割當制かと　初笑ひ　同
桐火鉢すでにあかがね取はづし　大阪　いづみ
ぶん〳〵と斯くの如くも終電車　同
煤拂ひ　こんな銅鐵　まだあつた　奈良　晶平
輪飾りを　今年も同じ　釘へかけ　同
一べんは話のたねにパーマかけ　大阪　串郎
迷信と　思へど母の　意にまかせ　同
火叩きが　ちぎれた儘に　日本晴　大牟田　平人
戰線と　銃後を護る　君と僕　同

徵用令に應へて

徵用の　首途に茶柱　立つて居る　大阪　實穂

一萬トンおれの力はどこにある　同
良民へ軍刀吊つた　聽診器　大阪　千斗
日本の　領土になるを　待つ羊　同
たまに出て井戸の蛙の我を知り　大阪　一望

學友高等に合格

征服へ　青春などは　知らぬ顏　同
戰友の　夢花嫁を　もろてゐる　南支　松太樓
さし上げてやれば支那の兒も笑。　同
警備府に　女の客が　一人おり　大阪　博也
征く友を　前に唱つた　海行かば　同
名曲が流れて何時か寢てしまひ　尼崎　佐八郎
宿直も　僕の生活の一ページ　同
白粉で　世帶やつれは　隱されず　大阪　詩朗
轉業も　脚袢が似合ふ　程に馴れ　同
人生の　裏を知つてる　皮梅科醫　大牟田　逸桂
折鞄　廿年目の　土地を　聞く　同
陳列は　商賣と逆な　標語出し　大阪　牛歩
四五時間署で待たされた十二月　同
陰膳と　本年も年を　取りました　兵庫縣　尙代
軍事便三日なくともあんじられ　同
社則嚴しき　職員の　擧手の禮　大阪　茂路
月皓々と　金策の　影映る　同
寫眞だけとつて桃われすぐこわし　大阪　伊三郎
勝つ國の　元旦　辨當箱を　もち　同
老年に　達したか猫　すみにゐる　釧路　孤浪
處世術知つて未だに生き字引き　同
敬禮を　しに街へ出る　初年兵　大阪　勢三

タバコ値上

くらしから 遠く離れて 光有り　同
初日影 土間の俵に さつとさし　大阪 綠柳
へへとんでも 無いこんな體に嫁なんと　同
内申書 筆一本に とりすがり　名古屋 笹路
行列は風呂屋へつゞく阿呆らしさ　同
空閑地 勝抜くまゝで 春近し　大阪 ひろし
二十二時まだ母さんにある仕事　同
リヤカーは重い鼻唄うたはうか　大阪 正太郎
後幾日 だのに本代 かさむなり　同
初詣 娘 三人 はなやかに　大阪府 庸司
同窓會 中尉の服が 三つあり　同
淑髪へ 少し未練な 端の渦　青島 委滄浪
齒の手入れなんて大將儲けたネ　同
捕虜の辯 敵前上陸 されてゐた　大阪 千枝丸
通勤の 腰掛けられて チト眠り　同

春塲所雜觀

大關の 名に負けられぬ 名寄岩　鳥取縣 悟志
けふ樂日安藝と双葉で沸き返り　同

榊原温泉にて

戀もなく 七栗の湯に 浸るなり　大阪 白路
丹前が 着度いと便り 戰地から　同
病院の 廊下一筋だけ 覺え　京都 默魚
きこしめす世帶のぐちもちとこぼし　同
南方談 少しのほせて 歸る風呂　宇和島 迷峰
親友の 强身默つて 上るなり　同
召集令はつきり度胸すわるなり　滿洲 泥柳
久々のちちはは笑ふだけで足り　同
モンペーの 女が强く 國强く　尼崎 治
粉雪をけつて元氣なランドセル　兵庫縣 庄内
湯上りの 耳へ石鹸 つけて來る　池田 雀草
級長へ 母は嬉しい 氣をつかひ　大阪 彌生
お上手をかへつて課長に叱られぬ　神戸 青峯
見合して きまり文句で 斷られ　兵庫縣 若蘭
神技へは 空の要塞 あつけなし　廣島 可學
初詣でいかにも大きいリボンなり　西宮 加奈子
增産へ 今一息の 纖手なり　出雲 研路
大阪辯すらすら言へて利に聰し　大阪 風情
繪具皿 赤がたらない 世界地圖　京都 宕川
迷子と聞いて我が子の手を握り　兵庫縣 勇風
讀みかけの本を伏せてる子の机　池田 白兎
サービスとサービス料の反比例　大阪 鐘生
ヒューズ位ひ患者の中の電氣屋が　大阪府 多不知
向ふから欠伸移つてくる夜汽車　上野 白鳳子
初産の 電報徵用 先で受け　大阪府 仙人
見合とも知らずに母の供をする　兵庫縣 甲東
破れ傘 默つてさして 出る暮し　横須賀 信常
來る人が昔の値段 云ひ竝べ　大阪 憲勝
錄音で 議會を聽ける 有難さ　兵庫縣 葛藤
落合こ夜業だつかと湯につかる　大阪 聖仙
地球儀を 前に見直す 大戰果　滿洲 しげを
米英に 勝つ大弓を お年玉　大阪 初三
海鷲に なると長男 胸を張り　尼崎 美津夫
鯛が出て 久方振りに 飲み過し　兵庫縣 宗坊
遠い遠い 戰地の便りある机　池田 良
病ち子持ち母親同志はすぐ馴染み　大阪 出目金
早出して 母の苦勞の 思はるゝ　尼崎 隆風
初年兵 お國訛りで からかはれ　滿洲 亨
母なれば 子の勳功へ 强く生き　大牟田 三千樓
素顏よし 必勝祈願の 娘さん　尼崎 櫻城
燃えさうな産着で母の膝にゐる　大阪 風柳
寄り添うて 歸りを急ぐ 共稼ぎ　大阪 惠美須
大部屋はかるいねたみを捨て切れず　兵庫縣 花子
道ぶしん 土管の中は 誰も居ず　尼崎 美代子
霜柱 とかして今日も 一二三　尼崎 柳湖
又ひとつ 皇恩を知る 國がふへ　大阪 花美
軍事便 油の付いた 手でもらひ　大阪 香月
配給で枯れた菜葉も買はされる　大阪 松風
坂道を越えてハイカー唄になり　名古屋 香亂
釣鐘と 別れの寫眞 撮すなり　尼崎 松綠

移轉

それはこゝこれは二階と母の汗　兵庫縣 泉泡
衣料切符 財布の底に 堅く居り　芦屋 公子
同甘同苦 同生共死と 誓ふ國　諏訪 臥牛
日本の香ひ 元朝の髪油　大阪 照二
死んでも自動車嫌ふ祖父だつた　尼崎 光生
今日も又 工場の空を 一機舞ひ　松江 祥月
子澤山 さあ撮します 繰返し　朝鮮 茂
初春を 銃取る心で 祝し合ひ　大阪 秀夫
御見舞の 品配給の 品ばかり　松江 初惠
算盤を我が子にかすと走らせる　横濱 楓葉

柳川 世界史（XXII）

戸田孤篷

（二九）亞米利加獨立史と佛蘭西

佛蘭西の消極性

佛蘭西の女は世界一所帶持がいゝ。小金を貯めて偷安を希ひ。それでゐて感情のおもむくまゝに脫線する。ルイ十四世の榮光は對內的成功にうぬぼれ、植民政策に於ては英吉利の後塵を拜し努力的建設精神には普魯西の威氣に壓倒されてゐた。

品切れになるとも知らず列に立ち
寒風の金看板はゆれにゆれ
乘りおくれそれから未婦亦もめる

啓蒙運動

立法司法行政が分立する三權分立の思想は立憲の根本精神である。大憲章（マグナカルタ）以來英吉利は曲りなりに憲法政治の國である。ルイ十四世の所謂「朕は國家なり」は一つ間違ふとローマの暴君ネロ帝になり兼ねない。お向ひの憲政への憧れがモンテスキューの「法の精神」となりルソーの「民約論」となる。それでゐて本家の英吉利はこれらの過激思想にはたゞニタ〳〵と笑ふだけで相變らずの王政をつゞけてゐる。

天才を父は默殺してしまひ

亞米利加の獨立

新教舊教の爭のさ中自由の天地を求めて淸教徒が輕舸メイフラワーに投じて新大陸に移り住んで以來北亞米利加大陸は大部分英吉利のものであり蘭佛も尻馬にのつたが、はかばかしい開拓は出來なかつた。月日のたつに從つて分家が一人前になると一人前の理窟を云ふ。胡麻の油は搾れるだけ搾れるが、植民地はそうはゆかない。こゝに印紙條例茶稅その他の噴嚏の導火線があらはれ、本家のふり向かなかつた佛蘭西製民主主義の共鳴者となる。

搦手へまわるときめた乘りおくれ

かくて十年にわたる亞米利加獨立戰爭となり。獨立成功。にくまれ役の英本國も、好い子になつた佛蘭西も國力消耗。英國は小ピットの健腕に救はれ、佛國は財政破綻の一途をたどる。

離緣狀それも世話好き書いてくれ
星條旗立てば立つたで祝酒

（三〇）佛蘭西大革命史（1）

佛蘭西の社會

王民關係の下剋上、啓蒙思想、財政紊亂の上に僧侶、貴族、平民のさけられない運命的な原因が佛蘭西大革命へ拍車をかける。少數の特權階級と多數の平民、富は全くそれに反比例してゐた。

老病死、僧も貴族も百姓も

三部會

最後に國王ルイ十六世自身の優柔不斷が大きな役割を受持つ。チェルゴー、ネツケル等は理財家としてのほまれが高い。それでゐて憂國より自己の利害を忘れることが出來ない。王は民心を察して往古の三部會（僧・貴・民の議事機關）を平民に有利な狀態に於て再會したが、拔けたとこだらけ。事態惡化。國民議會成立。

お人よしだけで王樣つとまらず
御褒美がないときつちりあつちむき

バスチーユ

王樣は王の威嚴を云々し、國民議會には國民議會の立場がある。その間に氣の早い民衆は國事犯の因はれてゐるバスチーユ破獄へ。時に一七八九年七月十四日。

牢番も手傳ひにくる牢破り

人權宣言

足もとに火のついた貴族は國外に逃亡。王もヴェルサイユから動かれない。巴里全休市民のパンも未配。かつて亞米利加獨立のおせつかいに行つたラフアイエットが人權宣言を發表し、王の巴里還都大歡迎。

憂鬱の飽和を破る大花火

立法議會

佛蘭西のあばれるのは勝手だが妙な思想にかぶれられてはかなはない御近所衆、申合せてぐるりから佛蘭西へ侵入過激派も溫和派も王黨もとにかく協力といふ事にして立法議會をつくり外敵にあたる。その間に王の國外逃亡未遂の合ひの手も入る。

あの顏であれ過激派の頭目さ

ギロチン

溫和派や王黨が王樣を逃がしたとか敵に密通したとか。やゝこしい話の連續の中に過激派が斷然勝を占めて國民公會が出來。王の處刑問題が第一の議題に上り、多數決を以つて弑逆を行ふ。王に於てしかり他の反對的人物老幼男女地位身分を問はず殺戮に殺戮が行はれ。首切役人のエネルギーの節約と被殺者の苦痛輕減と云ふ人道的注釋つきで醫師ギロチンがギロチンなる殺人器を新作する。

音もなくギロチンもとへ戻したり

艸木徒然

西田艸樂

難波津の梅

古川柳から梅の句を拾つて見ると、百句に餘る。菅公に關する梅の句が斷然數に於て多い。次に安倍宗任の、「我が國の梅の花とは見つれども大宮人は何といふらん」の和歌に關係ある句が多く、その他姙娠した嫁と酸つぱい梅の句、姑が梅干にたとへられた句、名物の梅加工品など賑やかである。その數多い句の中に

難波津の梅から開く文の道

といふ句がある。これは申す迄もなく、

難波津の歌は四角な口で
よみ　古句

應神天皇の御代に半島から來た博士王仁が、朝鮮との交通の便よき難波に都を定めたまふた仁德天皇の御盛業を稱へて奉つたといふ。

難波津に咲くや木の花冬籠
今を春べと咲くやこの花

の歌に關するものであるは說明を要しないところであるが、句も「梅から開く文の道」といつてゐる通り、難波の歌にある木の花は梅と斷定したものである。

「梅から開く文の道」文の道については正史の認むる處で博士王仁は、應神天皇の朝、百濟より來朝して論語十卷、千字文一卷を献上し、皇子菟道稚郎子の師として漢學を敎へ奉つた。これが我國に漢學の傳來した初めだといはれるから、これには異存はないとして、難波津の歌ははたして王仁の作であつたかどうかは俄に斷定しがたい。或は後世の作だともいはれてゐる。

歌の中の「木の花」に到つては、これを梅だと斷ずるには愈々六ケ敷い問題である。

が、ともあれ、それ以來——實は何時からか知れぬ——難波と梅は深い緣故が出來て梅花を以て難波の表象にしたりする。學校の紋に梅を使つたり、名物に梅の花を畫いたり、此花區といふ區が出來たり、此の花踊といふものが出來て、そこいらに梅の花を描き散してゐる。

かうまで難波と梅の緣が深くなつた今日、それをどうのかうのと、議論するのは野暮な話であるが、學問の立場からいふと、一應論ぜられるも無理からぬことで、私も此の問題はかなり以前から心懸けてゐる一人であるが、王仁の歌が、その人の本當の作であるかどうかさへ判明せず、しかも、此の花に到つては何故梅に極めるかの判然たる論據が立たない。

元來梅といふものは、太古から日本にあつた樹であるかどうか判然して居らぬ。九州のどこかに野生があると主張する學者もあつたやうだが、野生してゐる植物に古來から土着の野生と、どうかしたはづみに、種が落ちて山野に自生するものとあるから、それが原產品だと斷じ難い場合があつて、梅が日本の原產植物であるとの斷定はつきかねる

では梅に關する文獻といふものはといへばあまり古いものがない。尙ウメといふ言葉が吳音の烏梅から日本語になつてゐる樣で、これをムメなどゝ書くのはよくないらしい。梅の木が太古から日本にあつたかどうかの問題はさて置き、梅花を觀賞することは支那から流行してゐることが察せられる。

支那でも、梅は實を藥に用ひたり、調味料としたことが花を觀賞したよりはずつと古い樣で、今日なほ鹽梅などの言葉があるのは鹽と梅で食物に味をつけた古のことが殘つてゐるし、烏梅といふ文字は梅の實をいぶして黑くした藥種の一つであつたことも、本艸の書に出てゐる。これは支那でもよほど古くから起つたことであるが、花を觀賞することは、戰國の時代に既に梅花に賦した詩があるから、これも日本の文獻などよりずつと古い。

太宰の帥大伴旅人が、その官宅に於て梅花の宴を開き、その時招かれた人々が梅花を歌に詠んだものが萬葉集に集めてある。これらが觀梅の記錄としては古いものであるがそれが漸く天平十二年のことであるから支那の史實から比較すると新らしいものである。その後平安朝時代に下ると觀梅や作歌が次第に多くなつてゐて、櫻を以て花の代表とする後世より見ると、往時はむしろ梅を花王としたかの觀さへある。

かういふ事情から觀ると、旅人の觀梅の宴から、ざつと四百年以前の仁德帝の朝に於て日本人がどれだけ梅花に關心を持つたかは疑はしいものである。恐らくその頃、この花といつて梅を指すといふだけの、深い梅に對する關心はなかつたであらう。梅の實を

募集句

一路集

組合　八步選

國策へ　組合　皆んな　氣を揃へ　可學

組合の總意献納機にきまり　子盛
組合の事で終日走らされ　彌生
老舗サラリ組合の札掛け替る　伊太古
組合統一屋號など呼ばず　臥牛
組合の定欵減私の項も入れ　凡平
親方が理事長になる時代なり　蛙兒
實積の順で組合席が出來　武士
轉業をする氣組合長を訪ひ　翠柳
組合の話に妻も意見出し　春童

食ひ花を觀賞る支那の風物はともかく、ずつと後世には つてゐるのであるから、難波津の歌の「この花」は梅とするには無理なことの樣に思はれる。では何故、この花を梅だと言ふかといへば、その歌に「冬籠、今を春べと咲やこの花」とあるから、冬季嚴寒に耐へて早春馥郁と咲出づるは梅花でなくてはならぬ、といふ樣な歴史も、學術も無視した說を唱へたり、古は梅花を以て花王としたから木の花といへば梅にきまつてゐるといふ樣な淺薄な議論をするが何ぞ知らん梅花を花王らしく扱つた時代は、難波の遷都よりはずつと後の時代であることに想到しないのである。

紀貫之の歌

今一つ古川柳の梅に關して苦情がある。それは、

百人は言葉もかけぬ梅の花

といふ句である。百人一首に一首として梅を詠んだ歌がないといふのである。

ところがこれは、作者も選者も迂濶であつた。百人一首に梅の歌がないことはないのである。只梅といふ字が見えないだけである。たしかに梅が詠んである事を紹介しやう

人はいざ心も知らず故里は
花ぞ昔の香に匂ひける　紀貫之

この一首は一つの物語として傳へられてゐる。紀貫之は都から度々長谷寺に詣で、宿とした或る宿坊に、今は長らく泊らなくなつてゐたが、或る年その宿坊を訪ふた所、坊の主が出て、「長らくお泊を願はないが、宿はかうして昔と少しも變つてゐません」と恨みごとを言つたので、貫之は庭の梅を一枝折つて右の歌を詠んで、「私はまことに故里のやうに思つてゐる。人はどう思ふか、梅はかうして昔のやうに匂つてゐるではないか」との意を述べたのである。そこで坊の主も

花だにも同じ心にさくものを
植けん人の心知らなん

と返歌して、「花でさへそうでせう、まして植えた私の心に變りはあるものですか」との意をもらしたといふのである。

此の歌は、花といつて梅を指してゐる。當時はそれほど梅花が代表的の花であつたことを物語る一例でもある。

大和の長谷寺に行つて見ると、今でもその遺跡がある。あの長い段々になつてゐる廻廊を右に牡丹の澤山な植込を見ながら、登つて突當を右へ折れて又登りつめた處に、古い梅の枯木があつて、傍に二代目の—實は何代目か知らぬが——若い梅の木が植へてあつて、紀貫之故里の梅と立札がしてあるのを見る。

私はしば〳〵こゝに行つて懷古の情に浸つたものである

燒香に組合と云ふ顏で立ち　秀三郎
殘置燈そこは組合事務所です　正起
組合へ陳情もなく捷ちつゞけ　小城子
組合の机に光る傷痍章　正起
組合旗今日一兵を送る列　菁紅
組合で古い屋號を惜しまれる　千斗
奉仕へ揃ふ組合の旗　葉光
組合にマレー語話せる人入用　猪三郎
組合は無理な願ひも聞いてくれ　祥月
組合のコンマが足らぬ公價表　千斗
組合の事務所も出來て山の村　三丸
組合の壁の標語に敎へられ　慶一
組合の部屋へ大きい地圖をかけ　英雄
組合の役持つ程に住み馴れる　菁紅
(佳)組合證夜店で稼ぐ暮しなり　千枝丸
(同)理事長も同じ染屋と云ふ組合　詩朗
(同)組合の力供出米に知る　佳春
(同)組合旗弔旗と代る日の悲し　菁紅
(同)組合を訪へば上京中と云ふ　千斗
(軸)組合で靴脫ぐほどに顏がきく　八歩

不足稅　春巢選

不足稅　郵便さんに詫を云ひ　彌生
不足稅　郵便さんとチト話し　千枝丸
不足稅取られましたとも云ふ　可學
不足稅惜しい〳〵切間に合はず　臥牛
不足稅臍くりらしいので拂ひ　祥月
不足稅取られて嬉しいラブレター　英雄
情熱が過ぎた紙數へ不足稅　詩朗
不足稅うちの秤にかけて見る　千斗
不足稅通信事務も知つた奴　白水
不足稅拂つて嬉し子の便り　若菜女
不足稅戻つて子供の繼を知り　凡平
不足稅別れ話と知らず受け　潮花
子を想ふ思ひが凝つて不足稅　佳春
不足稅へ配達偉さうな口を利き　春童
性分か知らねど困る不足稅　翠柳
不足稅など氣にしないい〳〵報せ　正美
母からの意見が不足稅で着き　葉光
不足稅癖なつかしき女文字　菁紅
不足稅男心を責めて來る　同
不足稅ナアンダこんな用件か　牛歩
受取人を受付へ呼ぶ不足稅　同
不足稅裏を反して突戻し　伊太古
不足稅切手はがれた跡があり　同
履歴書を入れてるつな不足稅　武士
配達の聲が大きい不足稅　同
(佳)不足稅坊やの貯金箱を借り　同
(同)三年の無沙汰を詫びた不足稅　勢三
(同)角切つて〳〵をしてある不足稅　千斗
(同)御屋敷の廣さ不足稅待たされる　三丸
(人)不足稅だまつて拂へぬ若さなり　春童
(地)そゝかしい友情も嬉しい不足稅　葉光
(天)不足稅納めて母の假名を讀む　翠柳

芳香は！
健康意識を增長す
伊豆椿
ゴールドポマード
純植物性
伊豆椿油本舗
大阪彩芳園

同舟近詠

松山　前田五健

卷脚絆こゝも戰ふ身のまわり
梅活けて勝ちぬく机拭き清め
神鈴に馴れて鶯鳴きつゞけ
もうそこに春が來て居る花鋏
神木も名木も一旦緩急だ
祭神は媛にまします椿炎ゆ

金澤　安川久留美

洋杖で叩くポストでありません
匙で粥すくひ遺産をもの語る
香具師に似てもう之きりの海苔を賣る
行列は釣の要らない金をもち
配給の酒は三晩とあらざりき
人相を悪く見らるる雪めがね
マスクとはそも〳〵刑事用のもの
床屋では言うて良い事ばかりいひ
足らぬ事斗り餘命を持て餘し
ポケットに煙草の粉ナとツケをもち
おみくじは五錢お宮も俗となる
濡れてゐる薪何貫何百匁
土も又金になるぞへ粗製品
南洋は螢内地は窓の雪
發溯と八十三で書いた文字
十七時繼しかるべき繩のれん
大官は急須の酒の味も知り
應接間一寸氣付のウヰスキー
四疊半一寸手輕に二十圓
モンペイの皺だぶ〳〵と健康美

仁川　池田可宵

茶に華に鍛へて滋味な帶を締め
脊の子へマスクはづして笑ひかけ

兵庫縣御影町　長崎柳秀

朝詣同じ願ひの人に逢ひ
市場籠なつ葉の中に在住證
戰捷の幸しみ〴〵と松の内
拗ねてみることを新妻心得る
金屏風他人のときは辛氣がり

奈良縣龍田町　嶋田翠峯

母の無い子にも甘べる人が出來
親があり子があり五十まだ勤め
隣り組みひよこをかへす家も出來

長野縣須坂町　高峰柳兒

逞ましい髭老兵の取得なり
闘心が湧くラッパの音ほまれの香
雪蹴つて征く背歡呼まだ續き
鳴く靴が東亞の展け行く歩調

福井縣小濱　村田眉丈

恩給で暮す長押の種ケ島
提灯をともす片頰の美しき
女傑なほ娘のやうな柄を着る
ヒステリーそれもか弱きもの〻武器
引越しの荷物さびしく後を押す
鯨幕國の鎭めにすゝり泣く
釣竿へのぞみをかける晩の膳
合同をしてむづかしい名の事務所
書道展歸りに墨と筆と買ひ
常會の學者週報ふところに
この頃は百圓紙幣も氣障でなし
床の軸龜といふ字は兒も讀める
俘虜の手記切々妻をおもう空
安ぶすまどの山水も舟があり
鬢附の匂ひ明治をなつかしむ

急性・慢性
化膿症に
本劑は品質至純なる二基スルフオンアミド劑にして、内服により化膿症の病原菌克服作用を發揮す。
故に、患者の苦痛とする化膿・疼痛・發熱等の症狀消退迅速にして短期間に根元的治癒を促進せしむ
淋疾・婦人科化膿症
外傷化膿・丹毒・面疔
齒槽膿瘍・眼瞼炎
中耳炎・扁桃腺炎
包裝二〇錠・五〇錠・一〇〇錠　全國藥店に有
YAMANOUCHI
製造元
山之内製藥株式會社
東京・大阪
アルジルファ錠
OP—17

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規 ▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切は毎月廿五日▼投稿先は本社宛

川柳雑誌社主催 建國記念川柳會

二月六日　於御津八幡宮

二月六日午後五時半から建國記念川柳會を御津八幡宮社務所に開いた路郎主幹は「神代を詠んだ句に就て」そのうんちくを傾けられ、建國を記念するにふさはしい、しかも興味ある名講演だった。當日は不朽洞會會員篠山籌彥氏の歸還挨拶があり、加川泉泡氏等の新顔の出席があつて例によつて和やかな句三昧の一夜を過した（幹事記）

出席者（順不同）

路郎・彌生・勢三・香林・登志緒・雅美・琅玕子・妄夢・綠葉・帆船・茂・美津夫・三葉・礎石・隆興・泉泡・詩朗・千石・幽王・茂・千枝丸・九一・文雄・不二・綠雨・拓郎・鮎美・寄與史・翠光・籌彥・嶺泉・アート・リリ

席題「背中」　互選

からかへば背中を向ける年となり　登志緒
背中から　夜店の父を　見つけだし　三葉
久遠の　友と　背中を　流し合ひ　茂
晝の湯に父の背中に　老を　知る　礎石
親しみの　もてる猫背の　課長なり　綠葉
孝行を　せよと背中を　もつて來る　翠光
爆音へ　背中の子供　そりかへり　隆興
ゆく歳を　背中に見せて　渡せ給ふ　文雄
産聲を電話で知らす　新家庭　拓郎
産聲を戰地の父に　聞かせたし　幽王
産聲が　二つどちらも　男の子　香林
産聲は　若い父をば　まごつかせ　千石
産聲に　手柄々々と　父の聲　琅玕子
産聲へ　早退けをした　靴をぬぎ　帆船
産聲へ　母親として　眼を開き　泉泡
産聲へ　モシヤ〳〵髮の　父聞る　千斗
産聲は　月給などに　還元せず　九一
神棚の　灯が産聲に　輕く搖れ　不二
爆音の　下産聲は　男の子　鮎美

席題「産聲」　鮎美選

兼題「井戸」　綠雨選

大休止　井戸を見つけた　騷ぎやう　幽王
防空に　井戸も一役　買つて出る　雅美
歸還して井戸の深さを　汲みあげる　翠光
井戸の中　覗いても見る　都會の子　拓郎
旅の宿　コンクリートの　井戸寂し　鮎美
傳說の井戸リュクサックと覗くなり　帆船
井戸凌へ　妻の顰もきいてやり　登志緒
くみあげた　水に戰地の　子を偲び　翠光
年寄つたなあとつるべへ子が代り　同
霜やけの手で井戸水をもらひにき　千石

兼題「先祖」　路郎選

御先祖へ濟まない二國の腕を撫で　綠葉
末席が　先祖のことで　いきり立ち　香林
御先祖に御先祖にと云ふ祖母が居り　妄夢
先祖など　問はず裸で　嫁にやり　雅美
親讓り先祖の土へ　種を蒔き　鮎美
御先祖の　生きて來た田に　勵む幸　佳春
經本の　汚れも先祖　からのもの　翠光
御先祖へ散華つたあの子の燈を點し　綠葉
一年に一度は墓の　雪をかき　三葉
南方に先祖の墓があると聞き　寄與史
成上り　先祖談を　避けたがり　嶺泉
先祖代々　護國の神となりました　寄與史
御先祖にすまぬ〳〵とおちぶれる　綠雨
御先祖の自慢ラシンと聞いてゐず　嶺泉
體當り先祖の靈も見そなはせ　白水
俺が先祖だ　南方へ行く眉太し　帆船
献納へ　先祖の土地も　手ばなす氣　寄與史
先祖傳來　などゝ左が　利くばかり　不二
赤貧の　身にもかかさぬ　墓參り　彌生
先代は　先々代はと　借りに來る　泉泡
一財産　できて先祖が　祀られる　九一
先祖から　太く受け繼ぐ　忠の道　勢三
耕せば　先祖の匂ひ　する田圃　文雄
海賊が　先祖英國　興亡史　帆船
御先祖に濟まぬ濟まぬと　派手なこと　泉泡
御先祖へしびれを切らすモーニング　拓郎
御先祖へ　博士に成つた　掌を合せ　詩朗
村を見て　海を見給ふ　先祖の碑　礎石

川雑 堺支部句會（堺）

二月二十一日　於角堂居　角堂報

格闘に　鎧通しを用意して　角堂
格闘の　眼鏡が飛んで　頁けになり　銃人
格闘の　跡悲慘なり　麥畑　竹葉
一騒ぎ　あつたと見える　柵のおれ　波夢造
格闘の　記憶をたどる　刑事室　詩朗
肉彈へ　集中彈も　凶か立たず　角堂
歸還して　配給の　話寒く聞き　銃人
配給も　酒とあつては　亭主が出　波夢造
配給へ　組長夫人　聲高し　同
子寶へ　純綿のネル　別にくれ　詩朗
配給が　來たので客も　御滿足　春翠
配給に　馴れて氣やすきおつき合ひ　竹葉
配給は　彼是言はず　拂うてる　角堂

川雑 梅田支部句會（大阪）

一月二十日　鮎美報

親の代　した約束を　子が果し　よう路
約束を　信じて女の　眼の輝か　吐空
行く先きで　歳を聞かれる　松の内　蒲人
松の内　一家の主人　にて候　紀川
松の内　案内　係も陽を　拜み　邦治
焚火したとこだけ雪が　とけてゐる　三司
割算で　豆炭配る　隣組　吐夢

川雑 尼崎支部句會（尼崎）

一月廿四日　於昭和莊　美知夫報

丸燒へ　雨傘一本　持つて出る　八櫻
付け鬚の怒つたときに落ちかゝり　寄與史
鬚立てゝ　親父の前で　てれくさし　一馬
鬚なせるくせを女工に見やぶられ　千石
鬚なるが故に工場の人氣者　加久榮
丸燒に　島居の位置が　近すぎる　鮎美
初年兵　同志氣があふ　ぜんざい屋　一馬
初年兵の　辛さは人が　云ふてくれ　利一
洋裝の　妹が來る　初年兵　千石
初年兵　嬉しや今宵　パンと寢る　寄與史
つきあひになられてゐる　初年兵　美知夫
手を付いて　火鉢をすゝめられ候　千石
火鉢への　上座をあけて　皆すはり　利一
定宿の　火鉢手と　手がおもしろし　寄與史
立喰ひの　背中へ雪が　吹きつける　利一
拾圓を　くずし立喰ひ　歸るなり　寄與史
立喰ひへ　易者の聲も　聞へて來　千石

川雑 神津支部句會（大阪）

一月二十三日　於乙平居　香林報

炬燵だけ　留守居に殘す　急な用　千賣良
おぢいちゃん僕を炬燵と　間違へて　嶺泉
上品にあたつて寒い　炬燵なり　若榮女
失戀の　冷え炬燵に　似てゐたり　同
寢る頃と炬燵を取つてとなられる　伊太古
炬燵などもつてのほかの子を育て　不二
案の條　炬燵明治の　話なり　同
炬燵から　指圖おやぢの　顔の嚴　香林

妹の連れの住所をてれてきゝ　晩浦
初戀は讀まぬ雜誌を借りに行き　千賀良
初戀を靜かに包む赤襷　同
初戀をしてから遲刻しなくなり　晴坊
初戀の主黑枠で凱旋し　乙平
母さへも恨むことあり戀を知り　嶺泉
待ちぼうけ成程これが初戀か　不二
初戀のお前と添ふたあつけなさ　同
初戀の金魚をほめたゞけで去に　香林
初戀のどちらともなく顏を寄せ　同

川雜　**下關支部句會**（下關）

一月十六日　於市多樓居

彈丸うつた手に增產の鍬を持ち　かほる
爆風よけ作つて夫婦仲が良し　三岳
確認をする目に冬の强い風　望水
全機無事彈丸の痕など數へ合ひ　井蛙
花鋏認めて奥れた音になり　益枝
若水へ兵の心を心とし　市多樓

川雜　**小郡支部句會**（山口縣）

一月二十五日　於鐵道倶樂部　井蛙報

君ケ代で送つた友のバイブです　望水
練習はせぬが君ケ代よく揃ひ　凡平
君ケ代に制覇の海の明け初める　井蛙
滿員の札に冷たくことはられ　同
滿員で氣まづい人と立ちならび　知天
滿員の中に車掌がやつと見へ　游記
滿員車足踏むまいとして踏まれ　井蛙
俺にだつて夢はあつたと賣詰め　恒生
覺悟出來また拔いて見る日本刀　凡平
改めて覺悟もいらぬ暮しなり　恒生
萬歲の聲に應へる途一つ　游記

市電川柳會（大阪）

一月十九日　翠芳報

交叉點電車一臺見ぬ寒さ　翠芳
交叉點子供は先に渡る也　綠雨
交叉點の様に渡る人　青雲
たち消えの炭をほやいて破れ火鉢　同
泣いてゐる火鉢の炭が消えかゝり　美奈子
火鉢の火消えて冷たい四疊半　翠芳
ぬれた手をあぶるに火鉢かきまわし　綠雨
羽子板を抱いて寫した春姿　美奈子
羽子板の子へ自轉車ほどなつとき　翠芳
靴下の破れ苦にせぬ時代なり　山人

川雜　**三池染料支部句會**（大牟田）

一月二十日　蝶人報

子を抱いて夕刊を讀む年となり　一葉
干柿は久方振りの母と來る　鷗水
澁柿の吊つてる儘に値が騰り　抱遙
澁柿を氣長に干して賣澁り　平人
父逝いて夜半のキセルの音も消え　子盛
年寄りでない節煙のコウリザシ　天風
勝手口獻立表は眞正面　初舟
御用聞來たは昔の勝手口　美弘
勝手口防空用具待期する　天風
勝手口嫁の氣風も覗かせる　一葉
回覽板勝手口から濡れて出る　初舟

川雜　**出雲支部句會**（出雲）

—創立十五周年記念大會—

一月十七日　於黑崎旅館　綠之助報

債券が買へた喜び貯金玉　梅乃
喜びの其の日が泣けて女なり　波子
まどろめば國の茶漬と母のこと　壽木女
十五字の祖母の危篤に皆あわて　同
お茶漬は待つてる友に詫びを云ひ　慶坊
雪となり母北空に手を合せ　榮兒
喜びの春へ小供のランドセル　芳丸
東條さん陣頭指揮の雪拂ふ　笑鬼
男對男あつさりぶちまける　遲兒
さら〳〵と茶漬で急ぐ男なり　伸郎
頭良い我が子ばかりをほめる父　かほる
滿十五航空兵は祖國のみ　まさる
捷つ國の男だ笑つて死んで來る　壽年
雪に嚴然大煙突は見下せり　水馬
お茶漬で濟ます若さの軍需工　快哉
お茶漬で今日一日を踏み出しぬ　研路
人形を未だ惜しがつて居る十五六　八雲
凱旋の妻喜んで言葉なく　紅雨
頭から叱つて奥れて有難し　さわだ
空だ海だ十五の希望の逞しさ　朴泉
十五時かわからぬ祖母を笑ほれず　紅ン坊
男なら大平洋にあこがるゝ　華村
十五夜の月あり防空兵靜か　龍人
喜びへ仙臺平のすれる音　笑朗
廻轉椅子頭の良いのに向きたほり　大朗
新記錄男となつた血が躍り　互苦路
頭から否定し切つて座が白け　比呂志
大頭ばかり揃つて飲む話　同
通信簿手にはしやいで子は歸り　雨舟
歌送へちと忙がしい茶漬なり　康公
お茶漬で氣樞に基地を立つ若さ　莞路
兵に謝しお茶漬の味噛みしめる　大鳥
北風に雀一羽の思ひごと　綠之助
常會のお世話老後の生きる道　同
呑めば呑んで喜んでくれる母　同

川雜　**松江支部句會**（松江）

一月四日夜　於祥月庵　祥月報

再生は再生丈けの値打ちなり　薫
增產に娘同志の紺がすり　莞路
娘同志依れば話題は佐野周二　祥月
再生の瞳にのんびりとどびが舞ふ　龍人

一月十八日夜　於溫泉旅館

あの頃の想ひ出枯れ芒唄ふ　山川兒
三人目放任主義の赤ン坊　同
日本の力を見せて製鐵所　糸葉
製鐵所の煙り夕方近くなり　叮紅
三人目頃から母は老ひてくる　遲兒
國營には未だ早いけど上衣きる　快哉
國營までゆつくり呑んでる二等兵　榮治
增稅に三味の糸など切れたまま　莞路
國營する友へ淡雪またやまず　祥月

川雜　**豐中支部句會**（豐中）

紫香報

餅つきへ臨時ニュースが聞へて來　水客
百燭の下で妾宅餅をつき　潮花
敗入の事にはふれぬ婦人服　水客
婦人服も繼ぎます妻の手内職　綠翠
婦人服世に生きて行く美を捨てず　水客
婦人服工場の塀を横に拔け　紫風
出稼ぎのドレスへ夜のしみがつき　風柳
殘置燈へ細くのびてる婦人服　潮花
もう春がそこまで來てるワンピース　萬的
婦人服南京豆をもらつて來　夏子
ハイキング婦人服のは先に立ち　良
春場所へ父と來てゐる婦人服　清子
陳列の桃太郎にも戰時色　香月
タイピスト眼鏡をかけて老けてゐる　雀草
金の事になれば眼鏡をかけ直し　風葉
用件を聞く手は眼鏡拭いてゐる　紫青

川雜　**大洲支部句會**（愛媛縣）

於とぎや旅館　椋影報

川霧の晴間に浮いた舟一つ　柳水
肩に晴れ足に晴れ來て空の澄む　赫堂
待ちぼうけ汽車の時間へ顏がより　椋影
川舟へ釣立ての鮎そりかへり　赫水
釣竿をしまふと隣一つ釣り　曉明

川雜　**岡山支部句會**（岡山）

九坡報

銃劍へ敵は大きく手を擧げる　笛六
銃聲は今南方の風を衝く　同

ニッコリと日本を護る 銃を負ひ 九坡
銃眼へ 今日は死ぬべき 眼で覗き 灯竿
第二乙銃が重たい 兵でした 同
口笛でも吹いてゐさうに 落下傘 鶏城
落下傘 下界は春だ なと思ひ 九坡
落下傘 土人の拜む 中へ降り 灯竿
山川草木 二つ三つ四つ 落下傘 叮紅
飛降りた 開いた雲を ひきさいた 鶏城
落下傘 ひらかぬまゝの 悲劇です 九坡
落下傘故郷によく似たとこへ落ち 叮紅
落下傘 だんだん大きくなつた川 灯竿
奥座敷 旦那一人を 捕虜にする おぼろ
日の丸の 街を淋しい 捕虜の列 灯竿
捕虜となる身へも握手が交はされる 同
笑はせる 積り寫眞屋 口を曲げ 同
晴國の 兄が足らない カメラなり 同
カメラの手柄 母さんを 若く撮り 鶏城
手間の要るカメラ あやや寸稱かきれ 同
カメラもう動かぬものは撮りつくし 笛六
カメラマン敵の死體に跨つまづき 同
戀人の資格の中に カメラ持ち 同
うつるそと言へば近くの兒等は逃げ 同
財産の中の一つにあるカメラ 笑風
カメラ買つて此處も要塞地だと知り 鶏城
厚生車背中の汗で 貫を決め 同
時代相こゝの驛にも厚生車 鉄矢
初夏の月 厚生車へも鈍く照り 曉聲
下駄履で 一客すます厚生車 蜂蜜
厚生車 隣の人が歸つて來 信太郎
蜜蜂の樣に働く厚生車 曉聲
やつと間に合ひ 厚生車 汗を拭き 耕水
厚生車我が子を乘せて見たくなり 紫翠
故障車を 振返つてゐる 厚生車 耕水
厚生車 産婆さんだと 知つてゐる 鶏城
厚生車 お客を下ろす 坂になり 九坡
厚生車 あなたは輕い とは言はず 鶏城
新婚の 離ればなれに 厚生車 紫翠
厚生車 旦那の荷物 大きすぎ 灯竿

阪大川柳會（大阪）

一月二十六日 利生報

檢溫器 讀めば看護婦 派手に振り 柳秀
檢溫器 こわれたまゝに 一家無事 同
老眼へ 斜めにうつる 九度三分 利生
細立てた 事を知つてる 檢溫器 同
檢溫器 祈りながらに 挾むなり 同
檢溫器はさんで主治醫趣味のこと 葉
熱發へ慌てゝ走る 檢溫器 正甫
檢溫器 持つて徵用 家を發ち 春巢
檢溫器 なしで五人の 子を育て 同
檢溫へ 一寸眼蓋を 開けただけ 葉
檢溫器 玩具でないと 取り上げる 柳秀
外出のまゝで課長は 去んしまひ 正甫
外出へ 婦長皮肉な 言葉かけ 利生
行先を 云はずに靴の 紐を締め 同
炬燵から 外出ですと 云ふてをけ 同
出は出たが 懷寒し春の宵 柳秀
折角の出る約束へ 碁の相手 つや女
傳言板 丈けに行先 しかと書き 同
改札で 出逢ふ時間に 邪魔がいり 同
名刺 戴いてくれたが お留守です 葉
外出の だしにも親は なつてくれ 春巢
營門へ 外出嬉しい 暴手の禮 利生
外出に 病人今日の 寒さ聞く 春巢
子だくさん出よう〜とぶらさがり つや女
戀敵 アッパカット 喰らはされ 利生
インテリーその腕力におぢ氣づき 同
敎養と腕力は 又別に出る 正甫
袖まくりして見たが腕力 蔵が寄り 香附子
滿員を腕力で押す 積りなり 同
腕力の話 秀才座をはづし 葉
女もうその腕力に ほれちまひ 同
ちと吃る 男腕力 出したがり 春巢
腕力に 自信があつて 支那へ來る 同
腕力があり門番で世を終り 同
腕力を信じて妻もついて來る 一彌
腕力が過ぎて學校へ呼出され 正生
相撲取になれと腕力 冷やかされ 柳秀
入學をしたのがいつち弱いなり 春巢
腕力はおよしと女將 中に立ち 柳秀
二階の人の腕力を信じきり 葉
腕力には勝てる彼氏も 情に負け つや女
たゝかれて 父の力へ涙ぐみ 柳秀
腕力へ 嚙みついてやる 覺悟なり 春巢
腕力の外に勝目のない 亭主 路郎
腕力の 點でうちの子 みとめられ 同
出戻りの 歳も知つてる 町會長 利生
美しく生れいけづに 育てられ 同
營門へ もうは入つたかと 母案じ 正生

松阪倶樂部川柳會（大阪）

一月十日 白面人報

寒がりが どうした事か 初日の出 伊太古
寒がりの スキー計畫 だけですみ 同
女房は さからう樣に 薄着也 生々庵
寒がりが 顎で指圖も 無精がり 同
見榮がどうあらうと寒がりすましてる 同
寒がりと云ふのが出世の邪魔になり 同
寒がりへ 禮の話 して歸へり 不二
風呂にて
寒がりへ 猿股の紐 まだとけず 同
元日ちやないかと寒がり胸を張る 正太郎
寒がりの 襟へ邪慳な 粉雪 舞ひ 博也
寒がりは 會社が見えて 走る也 同
寒がりは 大の火鉢で 陣をとり 一聲
内陣拜觀 もう寒さなど 忘れて居 孤蓬
寒がつてなどは居られぬみことのり 聖司
寒がりた猫 寒がりを 知つて居る 同
霜踏んで 寒がりの 足早い事 同
寒がりの 南方行きを 買つて出る 乙平
寒がりへ 炬燵の灰が こぼれて來 香林
奥さんの 式服やはり 胴着 着て 曹天
松の内 旅で眺めた あつけなさ 博也
儀からぬ 電話がかゝる 三ケ日 帆船
松の内の日記かためて 書かれたり 博也
松の内 寫眞ブックを 貼つただけ 香林
モーニングは吊したまゝの 松の内 白面人
三ケ日 まだ勅題の 句が出來ず 同
朝風呂を 樂しめるのも 松の内 正太郎
敵機の噂しい〜やつぱり松の内 生々庵

一月二十四日

リヤカーで 會德 像も 應召し 生々庵

非特異性全免疫元
オムニコメット
本劑は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。
（適應症投與）
流感、各種肺炎、肋（膜）膜炎、扁桃腺炎、中耳炎、蓋膿腫、其他外科、急性、熱性、炎衝性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し廣汎に渉り著効を奏す。
（特長）
注射無痛、副作用絶無、用法簡單、奏効迅速、價格至廉。
（包裝）
二〇〇〇瓦入 二〇〇〇瓦入
一〇〇〇瓦入 一〇〇〇瓦入
一〇〇瓦入 一〇〇瓦入
一文飲廳星一
發賣元 株式會社黑田藥品商會 大阪・東京

リヤカーで引越した頃なつかしみ　同
リヤカーのついでに蜜もつんでゆき　同
リヤカーに蹴りの子供乘つけられ　伊太古
リヤカーで又アパートを變へてゐる　同
リヤカーについで〳〵がふえてゆき　同
リヤカーが不時着となるいいとんど　不二
リヤカーは對スコアーへ放つとかれ　同
轉業 完了 リヤカーも賣れ　孤蓬
外交も上手リヤカーも上手　同
リヤカーをよけて野草の露にぬれ　雅美
リヤカーへ荒驚氣取りで乘込めり　寒浪
リヤカーのビール割そう氣にかかり　乙平
月賞番酒屋のリヤカー借りてくる　好郎
ギリ〳〵の一滴ストロー音を立て　生々庵
詩人の夢のストローで飲んだ日もあった　同
ストローがなんだ途中で割れ居る　同
引越の机廐務課にまかされず　孤蓬
女房が朱を入れ間取出來上り　同
偽らぬ委立飲列をなし　乙平
京美人うしろ姿も景のうち　不二
押賣へ課長新聞讀みはじめ　好郎
先づ見廻はして坐り込む奈良の芝　寒浪
團欒を邪魔する樣に電話鳴り　同
なくられた方を母親かばつてゐ　久行
腕力を揮ひ男の負けとなり　香林
英米へ腕力示せ二十一　不二
作業場に社長の腕力恐れられ　乙平
たくの腕信し拓士を志願させ　孤蓬
くやしいが腕力も女房に負ける也　生々庵
停年と云ふに腕力ありあまり　同

有恒川柳會（大阪）

一月十四日　　鋭々報

豆やつてから御神馬の齢の事　鋭々
參拜は自動扉へ爭はず　萬雷
シャボン玉のよな戀いくつ女給老ゆ　鋭々
石鹸のにほふ手で醫者購につき　萬雷
一月廿八日　　青美

エンジンは好し大臣の來るを待つ　波夢造
何造る工場か黑い水を吐き　鋭々
增產へわれも一人の夜業の灯　同
熔鑛爐工場は夜も生きてゐる　同
疲れたとベルトは云はず廻るなり　同
工場も渡船も大夕焼の中　同
南方へ日向ぼつこの寫眞着く　青美
日向水僕もわたしも手をつける　波夢造
日向ぼこ頑固な親爺とは見えず　鋭々
植木鉢ころげて春の日向也　同

警察病院川柳會（大阪）

一月十九日　　正柳報

重役の娘貰つた不幸せ　正朗
重役の鞄も持たず出世をし　同
若年の重役書生肌も出し　久郎
腹たけは軍役ほどに出てゐます　正柳
軍役の息子も航空兵志願　柳一
重役もテク〳〵歩く範を垂れ　雨聲
重役に伍して悠々煙草喫ひ　同
白髮だと目ざとく見付け抜きたがり　正朗
後頭部覗けば白髮ばかりです　雨聲
銀髮へ國民帽もうれしけれ　湧三
白髮染娘に知れぬやうに置き　青柳
常會は白髮の故に上座なり　何葉
胃病には勝てず煙草も諦める　浩
まだ話すらしい煙草に火がついた　道朗
喫殼の林檎賣がまだつかず　同
待人來らず煙草ばつかりのんで居り　久郎
スパ〳〵と煙草もすうが仕事もし　青柳
長ぎせる悠々喫うて氣をもませ　同
出撃を前に最後の煙草喫ふ　正柳
ラヴシーンの煙草を捨てる時機を觀た　同
なんとなしマドロスパイプ持つてゐる　一艸
そんな煙草何處がうまいと母が問ひ　白路
喫殼のあまりに多い日の永さ　同

遞信病院川柳會（大阪）

一月十二日　於圖書室　　沒食子報

挨拶は唖の方が先に言ひ　卓二
聽えない振してるやう疑はれ　方正
傷痍章國の御稽となつた耳　沒食子
責任があるので聾くとくなり　同
聾いま聞いてはならぬことを聞き　喜由
大學で診て貰ふ氣を聾もち　同
筆談となると聾はあなどれず　同
親切な唖を聾は耳朶に受け　同
泰然自若聾であつて出來ること　路郎
聞えたかそうかとむこく扱はれ　同
聾ではあるが鵬翼賣つて臭れ　同
ステッキをついて明るい退院日　司白
まだ…なのにステッキかやさない　竹荘
ステッキを持つて假橋渡るなり　矢納
ステッキに凝つた時代もありました　晴夫
來ぬ筈はないステッキに凱をのせ　喜由
君がつくから僕もつくステッキ　同
ステッキがあればそこにふつてゐる　沒食子
ステッキを振つて一層氣障に見え　榮實
顯官のステッキたるを羨まれ　方正
ステッキを持たせ懷手で歩き　獨樂
水槽も注連縄かゝるお正月　晴夫
訓練のモンペ姿を見込まれて　榮實
吉兆の聲北風にぶつつかり　沒食子
大安かなければないで八を選り　喜由
手ぬぐひの白さ初出のさつぱりと　路風報
初出動所長と同じ歳をとり　一馬
作業服も折目付いてる初出也　日出男
悔ゆるなき年の初出のこの腕　與志美
髭おいて初出の朝が面白し　清龍
初出へは國旗の街をくぐり抜け　寄與史
高島田兄は笑ふてくれたけど　利一
母親が護衛してゐる高島田　路風
高島田バス一杯に匂ふなり　正二
高島田のせてるやうな歩きぶり　路風
高島田鏡の中に春の聲　金一
高島田これでこれから俺のもの　柳笑
高島田なぞと銃後にまだ餘裕　一馬
高島田解く暇もなく主を征り　清龍
高島田客を鳥居の前で待ち　利一

川雜櫻島支部句會（大阪）

一月十二日　　秀溪報

二階から御輿を拜む櫻筋　惠美須
私生兒を抱いて女の二階借り　直生
四疊半一人で廣く住む二階　風柳
產むまでは二階でよいと言ふ夫婦　眞星
妻たけが割引なしに聞いてくれ　無哲坊
お隣へ女房内緒で何か貸し　一作

もしほ川柳會（因島）

一月七日　於鱶蛸居　　翠柳報

移民村死線を越へてお正月　梅香
家の紋とは違ふなり背の紋　紋平

あざみ婦人句會（大阪）

一月十日　　秋子報

ハンドバック質屋の愚痴も聞さゐる　千代子
再製のハンドバックの柄が派手　秋子
夕焼かまともにハンドバックへ來　サカエ
氣ぶつ日ハンドバックをポント投げ　里村
女史と言ふハンドバックの型で出る　萬龜子
新しいハンドバックに夢を描き　花子
ハンドバックかゝへ港へ行く女　ひさみ
萬歳へハンドバックがじやまになり　夏子

我もまた御楯の一人
海路征く
娘々廟に詣でゝ
縁結ぶみ佛にして
派手なこと

佐野卜占

柳界展望

催

▼本社主催建國記念句會は二月六日午後五時半から御津八幡宮で開催、▼松坂倶樂部麻生路郎川柳講座は七日二十一日午後二時・同五時から有志により北野劇場で「交換船」を觀ての作句會▼有恒倶樂部川柳講座は十七日芦屋吟行雨月邸句會、二十五日午後五時開講▼阪大川柳會は二十四日午後四時▼大阪警察病院川柳會は二十三日午後四時▼尼崎住友產報川柳會は十二日午後七時▼大阪遞信病院川柳會は十六日午後四時▼二十七日午後五時から呻生會創立句會灘萬に開催▼川・雜堺支部句會は二十一日午後六時半、角堂居に於て開く▼川・雜花園支部創立句會が二月二十日夜木阿彌居に開催▼川・雜尼崎支部句會は二十日午後六時尼崎昭和莊で開催、鮎美氏出席▼川・雜下關支部では二月十三日市多樓居で開催

消息

▼村松夢裡氏（不朽洞會々員）は二月上旬、日本樂器株式會社九州支店長に榮轉と共に福岡市へ赴任された▼吉田水車氏（不朽洞會々員）は二月上旬、株式會社山武商會名古屋支店長として奉天から歸任されることとなつた▼戸倉曹天氏（不朽洞會委員長）はソロモン海戰で戰死された戸倉種雄二等兵曹の遺骨を二月二十一日に迎えて丹波に同行、二十二日無言の歸還式、二十三日村葬に列して歸阪された▼須崎豆秋氏（不朽洞會々員）はソコマメにたたられて缺勤建國記念句會の不參もそのためだつた由▼福田山雨樓氏（不朽洞會々員）は時局下問題の中心となつてゐる研究隣組について身魂を打ち込んでゐられるとのこと邦家のため多大の成果を收められんことを祈る▼西田呻樂氏（不朽洞會々員）は物語物の應募作品が入選近く出版される運びとなる由、又阪急電鐵で新設計畫中の敷荒植物園の資料提供に多忙だと▼篠山籌彦氏（不朽洞會々員）歸還▼中原銃人氏（不朽洞會々員）歸還▼澤田四郎作博士（滿洲）休暇歸還、直ちに原地へ▼森東魚氏（北京）令息の病氣について歸省されたが二月十二日來社▼島山一歩氏（客員）は「日本庭球」の二月號に「私の庭球復活論」を執筆、書き出しに「おしろいの下は光陰矢の如し」の句を警世川柳として紹介されてゐる▼生方敏郎氏（客員）の執筆編輯になる「古人今人」は二月中旬に八周年を迎え七十七號を刊行、使命達成に邁進されてゐる▼北邊を護る市川周峰氏から元氣な賴りがあつた▲函館川柳社では二月二十一日に白眼子、花戰そしん、洞南子、青柳、哉修氏等で落合思月氏を圍みての會を開かれた由▼朝鮮川柳協會仁川支部では二月に仁川へ出張の弘津柳鹿氏歡迎の小集を開催された由▼米田春童氏（大阪）は一昨年白濱陸軍療養所退所後家業に從事されてゐたが決戰下女子でも代り得る仕事に從事する時代でないと決然、川西航空機製作所の寮生補導職員に轉業された▼「ふあうすと」（神戸）が時局に鑑み改題と同時に社名も改稱する由、有力候補誌名として「楯」「務古」「もめん」「朝日」などが擧げられてゐる▼和田默然人氏（清水市）から三月に九州方面へ旅行されるとの賴りがあつた詩藝を肥やされることと想ふ

慶弔

▼河上一也氏（奈良）は二月六日にお孃さんを儲けられた▼朝鮮川柳協會々長今村螺炎氏が一月十一日長逝された、氏は「朝鮮漫談」の著者として知られてゐる▼食滿藤吉氏（南北氏令兄）が二月二十八日永眠された謹んで悼む

正誤

▼前號二四頁下段十二行目（天）遠征を祕して私服で歸つて來、美奈子▼四頁二段十六行目水の流れた草津川は水の流れぬの誤

★社の回覽板

★川・雜住吉支部（大阪）新設—幹事桝岡詩朗氏。★川・雜福岡支部（福岡市）新設。幹事村松夢裡氏。★川・雜御池橋支部解消。

廻轉椅子

▼前號は植字係の事故で遲刊の止むなき狀態となり、更に遞送關係で甚しい遲着のむきもあつて大變迷惑をかけたことをお詫びする。本號は社中に病人が出來、人手不足のため、これ又遲刊をまぬがれ難い狀態となつたことをお宥し乞ふ。しかし病難も殆んど解消したし、人手の充足もついたのでホッと一息ついたことを御報告申上げると同時に、刻々と取戻しつつあるので御安心が願ひたい。なほ柳友各位の深甚な御同情に對し誌上であつくお禮を申上げる▼前號は例によつて好評、殊に表紙の「戎克」は時局柄でもあり素派らしい人氣だつた、そのためと云ふ譯でもないが本號も同じ表紙で用ひることとした。正直に云へば私に表紙を苦心するだけの時間的餘裕を持てなかつたのが大きな原因である。▼前號で豫告したやうに本號から四ページ減したが編輯の苦心で內容は決して見劣りがしないだけのものを盛つた。そのため從來大きく見出しを扱つてゐたものも、文藝春秋のやうに追ひ込み編輯として卷頭へ持つて行つた。執筆者には氣の毒であるが直接川柳に關係のない原稿は決戰體制下の編輯としては止むを得ないとして諒恕ありたい。▼「武玉川研究」「草木徒然」「川柳世界史」「川柳の近畿大和篇」などは從來通りに組込むこととした。▼諸家寄稿の「彼を見て我を思ふ」は前號通り別欄に編み、時局的な句稿「斷食」は特に圍つて見た。▼各地柳壇の句稿はます〳〵殖える一方であるが本號から特に嚴選した多少の不滿はあらうが、一層の精進によつて佳吟を生むことに腐心されたいものである。▼斯うした編輯者の苦心に同情の眼を以て協力され本誌の頑張を最高度に押し進めていただきたい。（醫郎生）

院長 醫學博士 井尻辰之助
泌尿器科 皮膚科
大阪市南區千年町（島之內警察署横）
華陽堂病院
電話南㉕四四七五・二一八五番

社關係の人々

主幹

麻生路郎

賛助員

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡半太郎　長野晴濱　藤本卯之助　藤村作　讃原退蔵　浅田一　末弘嚴太郎

客員

島山一歩　沖野岩三郎　大島瀧明　大谷五花村　龜井哉修　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介　谷脇素文　高尾亮雄　生方敏郎　窪田銀波樓　山本雨迷　安川久留美　前田五健　柴谷宰二郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　森東魚　古川麗花麗　岩崎山石　藤井友郎　米本貴志子　内藤草一郎　三輪晩翠　西尾栞　櫻川不水　田中風葉　中原銑人　好崎申仙　濱田久米雄　好崎申仙　杉原大研子　菊澤小松園　魚住瀟潮　清水友帆　清水史路　清水白柳子　小畑自有浪　西川愁水　中内翠芳　多田市多樓　鈴木九坡　逸見灯竿　植山九天　岡島嶺泉　宮田不二　野元吐空　長谷川三司　田邊由布　小川靜觀堂　松浦帆船　福井哲　村上角堂　長野井蛙　水谷竹莊　明石柳次　八竹正柳　井上湧三　河上田翠光　武部香林　谷口綠葉　德永雅美　河野夜玉　野口柳太　小川恒明　飯尾寄與史　酒井美知夫　小林文月　谷川綠風　阿萬萬的　布施筑川　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　關根山彦　西尾栞　櫻川不水　田中風葉　中原銑人　好崎申仙　濱田久米雄　平佐平三　田中雨月　大坂形水　水谷鮎美　三輪晩翠　内藤草一郎　岩崎山石　藤井友郎　米本貴志子　山本雨迷　前田五健　柴谷宰二郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　森東魚　高尾亮雄　生方敏郎　窪田銀波樓　古川麗花麗　石井白面人　川出美根子　中島生々庵　戸倉曹天　古川風竹　前山北海　大西八歩　寺井鋭々　高澤一浪　戸田孤篷　岩崎柳路　須田秋　宮岡白峰　石曾根民郎　中西おさむ　原史風　正本水客　黒川紫香　丸尾潮花　岡田某人　岩崎松代　北川春巣　村松夢裡　市場沒食子　吉田水車　妹尾八九滿　西田艸樂　永田里十九　奥村丹路　淺田　末弘嚴太郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　森東魚　橋本綠雨　橋本波夢遣　藤岡至藝瑠　西川青美　米本儀助　吉田萬雷　★　布施筑川　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　關根山彦　西尾栞　櫻川不水　田中風葉　中原銑人　好崎申仙　濱田久米雄　武部香林　谷口綠葉　德永雅美　河野夜玉　野口柳太　小川恒明　飯尾寄與史　酒井美知夫　小林文月　谷川綠風　阿萬萬的　井上湧三　河上田翠光　長野井蛙　水谷竹莊　明石柳次　八竹正柳　村上角堂　福井哲　松浦帆船　小川靜觀堂　田邊由布　長谷川三司　野元吐空　宮田不二　岡島嶺泉　乙谷乙平　伊古田伊太古　池水湖心　月原胥明　高田抱遥　木下幽妄　中村聖司　篠山籌彦　福田某人　國弘半休　岩崎水虹　橋詰東雀　木下幽妄　中村聖司　篠山籌彦　福田某人　國弘半休　岩崎水虹　橋詰東雀

支部と幹事

道頓堀支部（大阪）萬よし
函館支部（函館）晟修
梅田支部（大阪）鮎美
出雲支部（島根）綠之助
鳥取支部（鳥取）鐵州
松山支部（松山）耕一路
松江支部（松江）碎月
大響局支部（大阪）柳太
西條支部（愛媛）英賀夫
城南支部（大阪）申仙
今治支部（今治）文庫
川雜光笑會（大阪）里十九
竹原支部（廣島）芳郎
廣島支部（廣島）久米雄
豐中支部（豐中）紫香
下關支部（下關）半休
北鮮支部（羅津府）美笑
蒙彊支部（張家口）柳路
上海支部（中華）天作
鐵道病院支部（大阪）春巣
櫻島支部（大阪）秀溪
市電川柳會（大阪）翠芳
布哇支部（布哇）麗花麗
堺支部（堺）角堂
岡山支部（岡山）九坡
尼崎支部（尼崎）美知夫
日和佐支部（德島縣）賢次
三池染料支部（大牟田）蓼人
大洲支部（愛媛縣）椋影
小郡支部（山口縣）井蛙
熊本支部（熊本）水聲
仁多支部（島根縣）一源
神津支部（大阪）香林
津山支部（津山）一將
花麗支部（大阪）妄夢
住吉支部（大阪）詩朗
福岡支部（福岡）夢裡

募集

第二十卷 第五號課題
三月廿日締切（十句以内）
借電話　奥村丹路選
目薬　吉田水車選

第二十卷 第六號課題
四月廿日締切（十句以内）
慾　池田可宵選
都會　正本水客選

第二十卷 第七號課題
五月廿日締切（十句以内）
寺井鋭々選
咳　菊澤小松園選
鏡

毎號募集（毎月五日締切）
近作柳樽（雜吟廿句）麻生路郎選
川柳塔　麻生路郎選
同舟近詠
各地柳壇（會報）
文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、半紙又は大型の原稿紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲「近作柳樽」は全作家の雅吟を募る
▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。
▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事。
▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
▲書體はなるべく楷書（川柳雜誌原稿）と封筒に朱記の事。
▲締切は嚴守されたし。
▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

規格判B列5號
川柳雜誌 第二十卷 第三號
毎月一回一日發行

定價
一冊 ㊥ 金三〇錢（送料一錢）
半ヶ年・六冊 金一圓八十錢（送料六錢）
一ヶ年・十冊 金三圓六十錢（送料十二錢）
外國送本には海外郵送料實費の加算を乞ふ。
御註文はすべて前金で願ひます。振替（大阪七五〇五〇）又は小爲替を御利用願ひます。御註文は何月號よりと御指示願ひます。轉居又は改號等の節は舊新併記の事。

昭和十八年二月廿五日印刷
昭和十八年三月一日發行

禁無斷轉載　本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

日本出版文化協會員番號 壹四五八〇
發行所 川柳雜誌社
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地（昭和ビル）
振替（大阪）七五〇五〇
電話土佐堀 三三三三番 八一六四番
編輯兼發行印刷人 麻生幸二郎
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地
東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社

廣告
本誌廣告に御用の節は川柳雜誌社廣告部へ御一報下さいますやう。

★毎號、戰線の勇士に送られたい方は部隊名をお示しの上本社宛に御申込み下されば郵税を奉仕して直接發送致します。

送本者名　住所　氏名

ガラス壜代用 紙容器

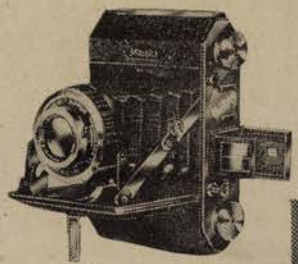
金屬代用紙罐
紙コップ

丸形・角形・小判形・組立式各種・藥品・食料品・菓子等の容器として最適

大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地
一二葉屋商店
電話事務所用 天下茶屋(五八〇二番)(五五八〇三番)
工場用 同 (五八〇四番)

セミ・ミノルタ

代表的國産カメラ



ブロニー
16枚撮り

II型F4.5付
¥117.00

F3.5付
¥141.00

距離計
¥21.00

(カタログ呈 要郵券十錢)

淺沼商會大阪支店

大阪市南區順慶町四丁目
電話船場905・1905・1396・5095番

麻生路郎著
新川柳評釋
定價〒 〇・八〇 〇・〇八
本筋の川柳で一粒選りの名句を寛め、その一句一句に、不即不離の評釋がしてある。

藤村誠一著・序文 麻生路郎・百田宗治
隨想集 詩人複眼
定價〒 一・〇〇 〇・〇八
川柳眼で書かれた隨想集。その大半は高鷲亞鈍のペンネームで「川柳雜誌」に發表されたもの。

麻生路郎著・柴谷宰舟畫
累卵の遊び
定價〒 一・〇〇 一・一六
名句に名評釋がしてあり、類例となる句が澤山寛めてある。漫畫三十二葉挿入。

戸田孤篷著・麻生路郎序
川柳 二千六百年史
定價〒 〇・九〇 〇・〇八
著者一人の創作・詠史川柳の尖端をゆく。

街の雜音(賣切) 大空(賣切) 人の一代(賣切)

堺市出島海岸通二丁目一八二
發行所 不朽洞
振替 大阪三〇三九二番

安産のために

妊娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

ワダカルシューム錠

大阪道修町 和田卯助商店

片瀬醫學博士述「安産のために」冊子呈上

楢林醫學博士 推奨
片瀬醫學博士 監査

SENRYU ZASSHI No・230
Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Nippon.

擊ちてしやまむ

謹告

謹啓　毎々格別ノ御引立ヲ蒙リ難有奉深謝候

陳者弊社儀二月一日ヲ以テ多年相提携シ來レル大阪鐵道株式會社ヲ合併シ同社線阿部野橋―橿原神宮驛間、古市―長野間、道明寺―柏原間、合計五十四粁三ノ鐵道營業並ニ附帶事業ヲ繼承致ス事ト相成候間何卒倍舊ノ御愛顧賜リ度此段御願旁々御挨拶申上候　敬具

昭和十八年二月

大阪市天王寺區上本町六丁目

關西急行鐵道株式會社

川柳雜誌第二三〇號　大正十三年三月第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）　●定價 金三〇錢 送料壹錢